

K-607

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

漆坊遺跡

発掘調査報告書

1982

尾花沢市教育委員会

「漆坊遺跡」正誤表

頁	行	誤	正
12	9	新旧関	新旧関係
14	2	覆土第V層	覆土第4層
16	20	富む	富み
19	17	荒い	粗い
19	26	孤線	弧線
20	26	1類	1 a類
41	3	ここでは名大G	ここでは各大G
42	16	敲打	敲打痕
62	25	検当	検討
62	31	去ることながら	さることながら

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

漆坊遺跡

発掘調査報告書

1982

尾花沢市教育委員会

序

本報告書は、尾花沢市教育委員会が昭和56年度に実施した尾花沢市大字牛房野字田沢地区に所在する「漆坊遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

尾花沢市を東西に流れる丹生川流域には、数多くの縄文時代の遺跡が発見されていますが、中でも丹生川に注ぐ支流で、牛房野川流域は、遺跡の最も密集したところといえそうで、上流から下流まで遺跡が点々と発見されています。

漆坊遺跡は、牛房野川によって形成された右岸段丘上に立地し、土器や石器などの遺物が多数出土する遺跡として、古くから地元の人々に知られていたところです。

このたび、県営の圃場整備事業にかかり、埋蔵文化財の保存の必要から、山形県教育庁文化課より委託を受け、同課の指導のもとに、昭和56年5月18日から7月4日まで発掘調査を実施しました。幸、多数の遺物が出土し、縄文時代晩期の遺跡であることが分り、中でもアスファルトの入っている壺、土偶、耳飾り、首飾り等今まで本市に見られなかった貴重な遺物が出土し、先人の歴史をたどる手がかりを得ることができました。

近年地域の開発事業と埋蔵文化財とのかかわりが多くなり、埋蔵文化財保護にかかる問題も多く、この期に市教育委員会としても、文化財保護普及に一層努力してまいりたいと考えております。

終りに、調査にあたって多大の御協力と御指導を賜わりました関係各位、また地元の土地所有者、発掘作業に従事された方々に対し深甚なる謝意を表します。

昭和57年3月

尾花沢市教育委員会

教育長 奥山 誉男

例　　言

1. 本報告書は、昭和56年5月18日より同年7月4日まで、山形県尾花沢市大字牛房野字田沢前に所在する漆坊（うるしばう）遺跡の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は山形県教育庁文化課より委託を受け、尾花沢市教育委員会が主体となり、調査にあたっては昭和56年度国庫並び県費補助金の交付を受けた。
3. 調査は次のような体制で実施する。

調査担当 大類 誠

調査補助員 菅野 代、熊崎 保・矢野文明（学習院大学学生）小田鶴 永・田島 新
(慶應大学学生)

発掘員 大類市太郎、大類利八郎、大類マサエ、大類喜一郎、大類ミツエ、大類ウメヨ、大類清治、大類芳子、大類三郎、大類栄一郎、大類庄次郎、大類五平、大類金弥、大類鉄男、大類はつえ、大類ゆわの、大類のぶえ、大類よし、大類清巳、大類信行、大類義男、押切竹広、押切てい子、押切はるえ
山口誠一、山口タケ子、山口庄太郎、山口芳五郎、柴崎石倉

整 理 菅野代、熊崎保、矢野文明、小田鶴永、田島新、菅原芳子、大類マサエ

調査指導 山形県教育庁文化課

事務局 事務局長 柳橋泰吉（尾花沢市教育委員会社会課課長）

事務局長補佐 奥山龍璋（尾花沢市教育委員会社会教育課課長補佐）

事務局員 吉田幸子（尾花沢市教育委員会社会教育課主事）

菅野与一 () " ()

4. 拓影図の作成は菅野代が、遺物の実測は大類誠、菅野代、熊崎保、矢野文明、小田鶴永、田島新が、そのトレースは大類誠が行なった。遺構のトレースは大類誠、矢野文明、小田鶴永が行なった。
5. 拓影図の縮尺は $\frac{1}{3}$ 、実測図は $\frac{1}{2}$ を中心としたが、一部 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{3}$ の縮尺率となっている。遺構の縮尺は版の関係上、任意の縮尺率となっているため、図下のスケールで表わした。
6. 写真撮影・図版作製・編集等は大類誠が行ない、奥山龍璋、菅野与一が補佐した。執筆は大類誠が行なった。

目 次

I 調査の経緯

1 調査に至る経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1

II 調査の概要

1 遺跡の立地と環境.....	4
2 遺跡の層序.....	6
3 遺構の分布.....	8
4 遺物の分布.....	8

III 縄文時代の遺構と遺物

1 遺 構.....	12
1) 土 壤.....	12
2) 石組遺構.....	16
2 遺 物.....	18
1) 土 器.....	18
2) 石 器.....	41
3) 土製品.....	52
4) 石製品.....	57
5) アスファルト付着の遺物.....	60
IV 総 括	62

挿図目次

第1図 調査概要図	3	第30図 石器実測図（5）	48
第2図 漆坊遺跡位置図	5	第31図 石器実測図（6）	49
第3図 土層断面図	7	第32図 石器実測図（7）	50
第4図 遺構分布図	9	第33図 石器実測図（8）	51
第5図 遺物分布概略図	10	第34図 装身具・動物形土製品	54
第6図 遺物接合概略図	11	第35図 土偶	55
第7図 土壌（1）	13	第36図 土玉・スプーン形土製品・土製 円盤・土版	56
第8図 土壌（2）	15	第37図 装身具・他	58
第9図 石組遺構	17	第38図 岩版・他	59
第10図 土器拓影図（1）	25	第39図 アスファルト付着の遺物	61
第11図 土器拓影図（2）	26		
第12図 土器拓影図（3）	27		
第13図 土器拓影図（4）	28		
第14図 土器拓影図（5）	29		
第15図 土器実測図（1）	30		
第16図 土器実測図（2）	31		
第17図 土器実測図（3）	32		
第18図 土器実測図（4）	33		
第19図 土器実測図（5）	34		
第20図 土器実測図（6）	35		
第21図 土器実測図（7）	36		
第22図 土器実測図（8）	37		
第23図 土器実測図（9）	38		
第24図 土器実測図（10）	39		
第25図 土器出土状況微細図	40		
第26図 石器実測図（1）	44		
第27図 石器実測図（2）	45		
第28図 石器実測図（3）	46		
第29図 石器実測図（4）	47		

図版目次

図版 1	漆坊遺跡遠景・遺構検出状況	65
図版 2	調査風景	66
図版 3	石組遺構	67
図版 4	g 大 G の遺物出土状況	68
図版 5	遺物の出土状況	69
図版 6	台付鉢・徳利形土器	70
図版 7	壺形土器	71
図版 8	壺形土器・鉢形土器	72
図版 9	注口土器・皿形土器	73
図版10	石器（1）	74
図版11	石器（1）、石製品（1）	75
図版12	石製品（2）、土製品（1）	76

付 表

付表 1	漆坊遺跡発掘調査行程表	2
付表 2	周辺の遺跡	4

付 図

付図 1	漆坊遺跡 A 地点 e 大グリット遺物出土状況微細図 (S=20:1)
付図 2	漆坊遺跡 A 地点 g 大グリット遺物出土状況微細図 (S=20:1)
付図 3	漆坊遺跡 A 地点 g 大グリット石組・配石遺構微細図 (S=20:1)

I 調査の経過

1 調査に至る経過

漆坊遺跡の所在する田沢地区は、尾花沢市の中でも養蚕的一大中心地で、寺内地区と田沢地区の間に連なる緩やかな丘陵地帯は、大桑園として活用されている。

田沢集落のある牛房野川流域は、市内のなかでも多くの遺跡が密集する地域の1つとして数えられ、特に漆坊遺跡は地元の人たちの間では、遺物が豊富に出土する遺跡として知られていたようである。そして、遺跡から発見された注口土器・石鎧・石刀・石棒・岩偶を大切にしている人たちが多い。

今度、県営村山北部第三地区は場整備事業として、田沢地区がその対象区となり、漆坊遺跡が破壊される恐れが生じてきただために、埋蔵文化財の必要から緊急発掘調査を実施することになったものである。調査は山形県教育庁文化課・村山北部土地改良区・尾花沢市教育委員会が協議を重ね、尾花沢市教育委員会が県教育庁文化課の委託を受け、昭和56年5月18日（月）から同年7月4日（土）までの7週間にわたって、漆坊遺跡の緊急発掘調査を実施したものである。

2 調査の方法と経過

昭和55年秋の試掘調査により、遺構・遺物が2～3ヶ所ほどに集中するのではないかとみられたので、発掘調査に入る前に数度にわたって分布調査と聞き込み調査を実施する。

試掘調査の結果をふまえ、5月14日に基本杭の設定を行ない、5月15日には一部の地形測量を実施する。

発掘調査は基本杭を基点にして、遺跡全体を10×10mの大グリットで覆った。試掘調査の資料をもとにトレントやグリットを設定し、粗掘りを行ない、精査区を設定する。遺跡の西側をA区、東側をC区と呼称し、A区では600m²、C区では500m²程度の精査を実施する。

東西軸をX軸、南北軸をY軸としたが、大グリットをさらに小さな2×2mの小グリットに分割し、調査の記録・遺物の取り上げ等はすべてこの小グリット単位で行なっている。

尚、グリットの名称は小グリット単位で、X軸・Y軸の交差する西北隅をグリット名称とする。

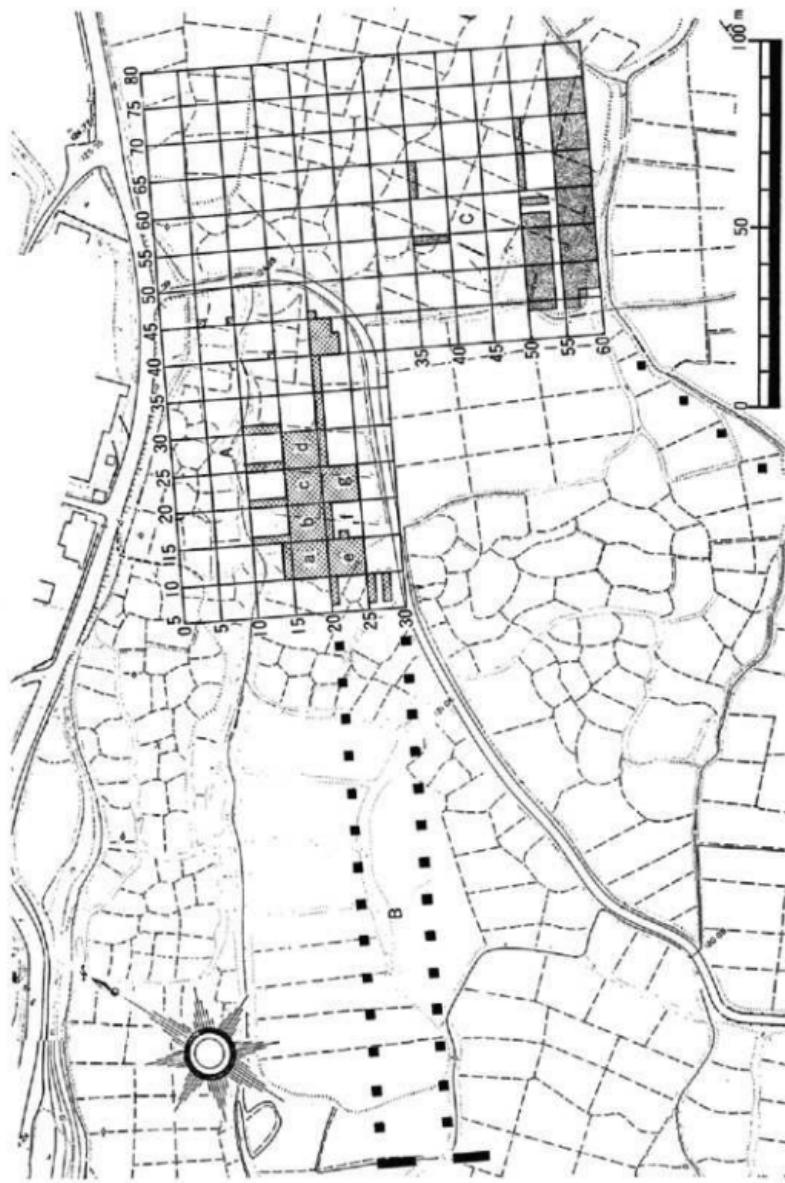
遺跡の南側をB区、北側をD区としたが、B区には磨滅した遺物が少量みられ、遺構・遺物は確認できず、D区は割と保存の良い遺物が確認され、一部水道工事で壊滅されているが、現在は尾花沢一牛房野を結ぶ道の改修で土盛され保存されている。

以下、調査の経過については付表1としてまとめたので、参照していただきたい。

付表1 漆坊遺跡発掘調査行程表

年月日 調査内容		昭和56年度						
		5月 11日～16日	18日～23日	25日～30日	6月 1日～6日	8日～13日	15日～20日	7月 22日～27日
準備	資材準備 調査区設定							
粗掘り	手掘り 重機使用			—				
面整理	面整理 遺構検出							—
遺構	プラン確認 及び検出							
精査	溝状遺構 土壙 ピット 石組遺構 遺物取り上げ				—			
実測	遺構平面実測 土層断面 遺物微細図 レベル記入				e大G g大G	b大G g大G		e・d大G
写真	全体写真 細部写真							
備考					常盤中学校先生方来跡 茨の袋小学校生徒来跡 市議会秘務委員会来跡 牛房野小学校生徒来跡 尾花沢市小中学校社会科 研究会調査協力 現地説明会			

第1図 調査概要図



II 調査の概要

1 遺跡の立地と環境（第2図）

尾花沢盆地は、間近に迫る山々、その山々から手足のように伸びるなだらかな丘陵が盆地を走り、各河川により発達した段丘があるなど変化に富んだ地形である。

田沢地区に所在する漆坊遺跡もそんな中にあり、西流する丹生川の一支流である牛房野川によって形成された右岸段丘上に立地し、標高は約122~124mを測る。

段丘は沖積地に発達したもので、小規模なものだが、他水田面より僅かに高くなり微高地形を呈する。

遺跡のそばには、現在水田として埋め立てられて形こそ失なわれているが、大清水と言われる大きな湧水地があり、十数年前までは飲料水や洗濯水など大事な水の供給源になっていたといわれている。今でも大清水のあった所は四六時中、水がかれることなく、しっかりと濡れている。

A区を「屋敷田」、C区を「坊」・「漆坊」という呼びならわしが今でも根強く残っている。遺跡の名命は発見のいきさつや、地域の歴史的な背景などから、今まで通り、漆坊遺跡の名で呼ぶことにしたい。

また、漆坊遺跡周辺には数多くの遺跡が発見されている。それらの遺跡を付表2として一覧表にしたので参照していただきたい。

付表2 周辺の遺跡

地図番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	立地(標高)	種別	時期
1	漆坊遺跡	743	尾花沢市大字牛房野字田沢前	沖積地(124m)	集落跡	縄文時代後・晚期
2	熊の前遺跡	新規	大字牛房野字熊の前	丘陵(140m)	包含地	縄文時代
3	オトリ沢A遺跡	746	大字牛房野字オトリ沢	丘陵(165m)	集落跡	縄文時代中期
4	オトリ沢B遺跡	747	大字牛房野字往行野	丘陵(165m)	集落跡	縄文時代前・中期
5	田沢遺跡(仮称)	745	大字牛房野字八ヶ峰	丘陵(161m)	城館跡	縄文・室町時代
6	岩木山遺跡	2333	大字牛房野字岩木山	丘陵(125m)	集落跡	縄文時代中期
7	安久戸B(仮称)	2334	大字丹生字盛岡	丘陵(126m)	集落跡	縄文時代前・中期
8	森岡山遺跡	741	大字丹生字盛岡	丘陵(165m)	城館跡	縄文・室町時代
9	森岡北遺跡	2332	大字牛房野字稻畑	段丘(100m)	包含地	縄文時代早期
10	大清水遺跡	2331	大字荻の袋	段丘(97.5m)	包含地	縄文時代前期
11	安久戸A遺跡	2338	大字丹生字志田	段丘(105m)	集落跡	縄文時代前期
12	大導寺遺跡	2339	大字尾花沢字大導寺	段丘(105m)	集落跡	縄文時代前期
13	二藤袋遺跡	778	大字二藤袋字下宿	段丘(130m)	城館跡	縄文・室町時代

新2 図 湯坊道施設位置図



2 遺跡の層序

発掘にはいる前の聞き込み調査によって、今から十数年前ほどに遺跡内のA地点とC地点一帯を個人的にブルトーザーを入れ、整地を行なっていることがわかり、その際多くの遺物が出土しているという。

このような事柄は、調査が進むにつれて次第に明らかになり、土層の堆積、遺構・遺物にも少からず影響を与えており、層序は地点により大なり小なり違いをみせるがA地点は割合複雑である。基本的な層序はe大Gの例をもって代表する。

第I層（暗褐色土層）耕作土で水を含むと粘性に富む。砂質性を帯びるが、縮りがある。磨滅の著しい土器を含む。

第I b層（黄褐色粘質土）いわゆるレンズ状堆積をしている土層で二次堆積の土である。粘性に富み、縮りが強くもしもふり状に黒褐色土を含む。

第I c層（茶褐色土層）砂粒や小砾を含むが粘性に富み縮りが弱い。全体的にザラザラした感触をもち、大豆大的炭化物を含む。遺物は磨滅が著しい。

第II層（黒褐色土）砂粒や大小様々な礫を多く含み粘性に富む。縮りが弱く、全体的にザラザラする。この層上は固く縮り、磨滅した土器や、一個体分の土器が破片でまとまっている場合がしばしばみられる。e大Gに限らず、各a・b・g大Gにもみられる。

晩期後葉の土器を含む場合が多く、特にa・b大Gに広がる第II b・II c層はそれが顕著である。

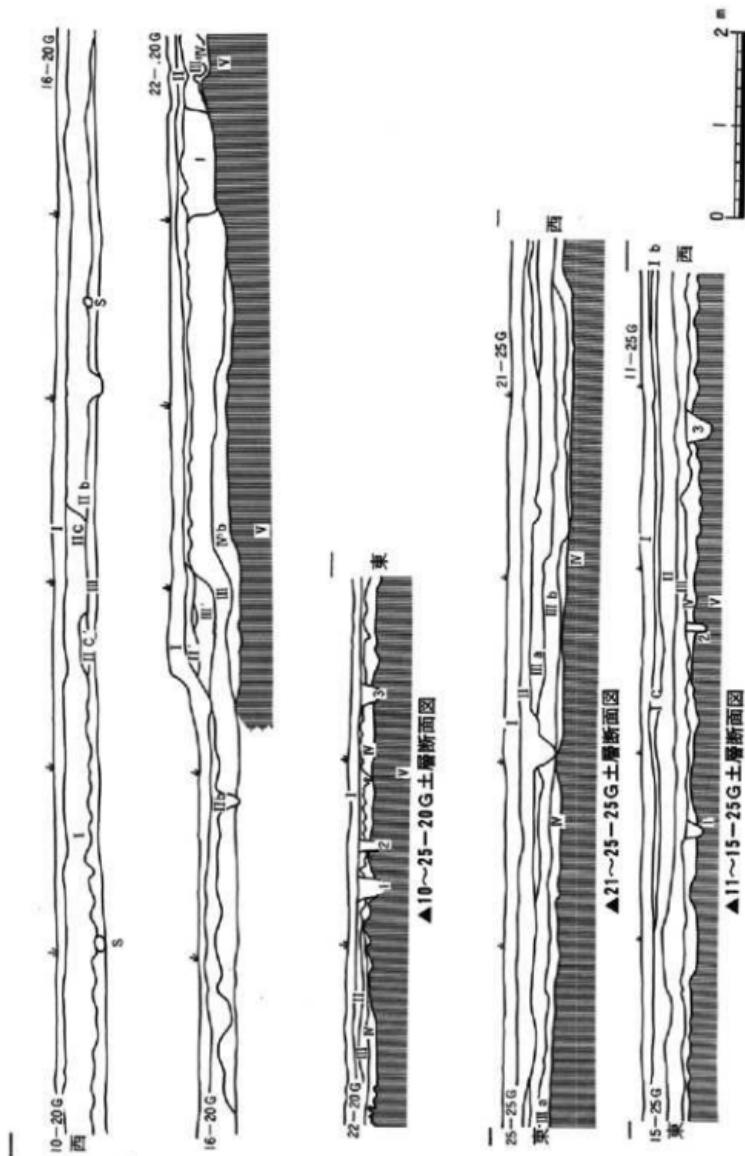
第III層（暗褐色粘質土）シルト質性を帶び粘着性に富み、縮りが強い。大小様々な炭化物を含む。晩期中葉の土器を主体的に含む包含層である。

第IV層（濁暗青褐色粘質土）第V層への漸移層であるが、砂質性に富むものの粘性があり、縮りがやや弱い。細かい炭化物を含み、この層上部に遺物を少量含む。

第V層（青褐色砂質土）漆坊遺跡A地点において基盤層となるものであるが、微高地の所では黄褐色を呈し、斜面や低地では青褐色を呈する場合が多いようである。砂質性に富み粘性に乏しい。水分を含むと崩れ易く、遺物を全く含まない。

また、a大Gの西側が盛土となっていることが、土層観察によってわかり、各型式の遺物が含まれている。このことから、整地はd大Gからa大G方向に行なっていると考えられる。遺物包含層は第II層、II b層、II c層、III a層、III b層、III c層である。第II層、II b層、II c層は晩期後葉の土器群が、第III a層、III b層、III c層には晩期中葉の土器群を包含する度合いが高いようである。また、第III層の最下部ないしは第IV層上部に晩期前葉の土器を含む傾向がみられるようであるが、単発的な出土例が多く、不明確さは免れない。後期の土器の包含層ははっきりしないが、c・d大Gでは漸移層に多く含まれている。

第3図 土層断面図



3 遺構の分布（第4図）

当時の地形としては10—16G杭から、25—22G杭を結ぶ北側に微高地が形成され、南側が緩やかな斜面になっていたようである。このことは土層断面に明確に表されている。

遺構が明確に検出できた所は、この北側の微高地で、基盤層が黄褐色を呈し水はけの良いところである。逆に基盤層が水気を多く含み、水はけの悪い青褐色を呈した斜面や低地からは多量の遺物が出土する。

しかし、十数年前に行なった整地のために、微高地の一部が削平されているところも目に付き、遺構が削りとられたり、遺物が壊され、散らばるなど遺跡の構造に対して変化があったものと考えられる。

検出された遺構は土壙26基、ピット43基、溝状遺構1基、石組遺構4基である。土壙・ピットはc・d大G区に検出され、溝状遺構はc・g区にまたがって検出された。石組遺構はg大G区において検出されたが、砾群が集中する所はa・b大Gの一部にもみられた。

4 遺物の分布（第5図、付図1・2・3）

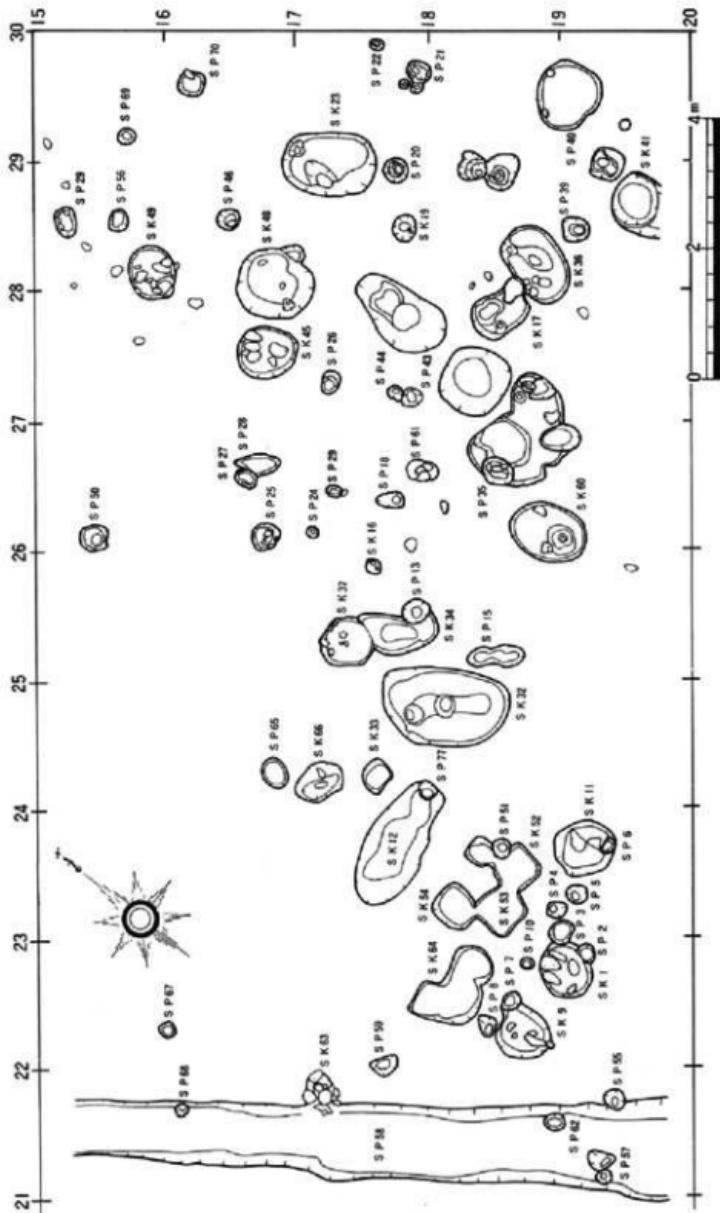
遺物は全グリットから出土するが、圧倒的に集中するのは、微高地を低地へつなぐ緩斜面で、この傾斜に沿い帯状に遺物が分布する。a・b大Gではつぶれた土器が重なるようにして出土する。時折それらに完形土器が含まれている。

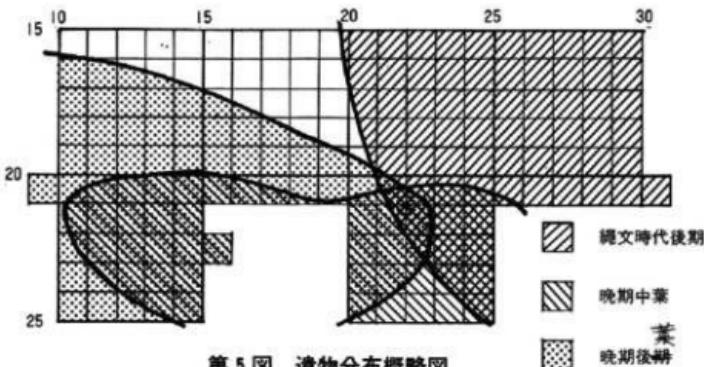
第5図は、遺物の分布範囲を大よその時期に分けて概略化したものである。縄文時代後期の遺物は、微高地のc・d大Gを主体に分布し、g大Gの一角に及ぶ。後期の土器はこの他、a・e大Gでも出土しているが単発的なものである。

晩期前葉の土器群は単発的で、e・f・g大Gにみられる。晩期中葉の土器群はe・f・g大Gに分布するが、主体はg大Gにあり、次いでe・fである。a・b大Gでは破片がごくまれに単発的に出土する。晩期後葉の土器群はa・b大Gが主体になり、次にe・f大Gで、g大Gの一角にのびる。

e大G内の遺物の出土状況（付図1）は、第II層に含まれているものを精査した時の状況である。全般的に大洞A式の土器群（RP 8・33・92・95、第24図54・58）が多く分布し、晩期中葉の破片が時折混在する。土器の出土状況をみると、RP43の脚付鉢（四脚）のように上から押しつぶされた状況を示すものや、RP66・68・108のように一個体の土器が細かくわれて出土するものがみられる。後者の出土状況が多くみられるが、特に第II層中部より上部に出土する土器はこのパターンのものが多い。そんな中にあって、14—22G周辺の遺物の状態は良好である。また耳栓は10—22Gから、土製小玉は14—21からまとまって出土する。

第4図 遺構分布図





第5図 遺物分布概略図

g 大G内の遺物の出土状況（付図2）は、e 大Gより良好な状態で出土する。第II層上面において大洞A式の土器片が北西側に散発的に出土する程度で、ほとんどが晩期中葉の土器群で占められる。微細図は第III a層上部から中部にかけての出土状況である。これらの遺物をすべて取り上げると、第III b層中部から下部に構築面をもつと考えられる石組遺構（付図3）が検出される。

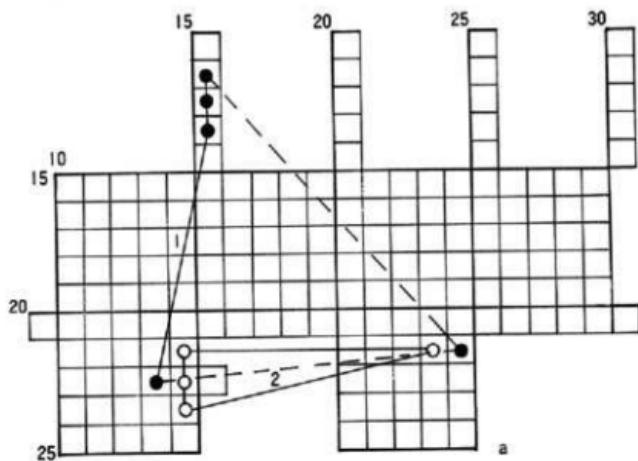
遺存度の良好な状態を示すのは、21-20G、22-20G、21-24-21-22G等に集中している。粗製土器よりも精製・半精製土器に良好なものが多く、注口土器（R P299, 315, 320）壺形土器（R P122, 141, 143, 146, 150, 222, 226）、台付鉢（R P115, 204）、浅鉢・皿形土器（R P118, 150のb, 342, 360, 382, 388, 424）などがみられ、粗製土器では底部が小さく口縁が大きい深鉢形土器（R P125, 129のa, 213, 335, 339）がみられる。g 大Gでの完全な土器はR P122の壺形土器で、1点だけである。復元完形のものでも細かい破片になっていたり一部を欠くものが多い。

石器では、石核や剝片類が多量に分布するが、各種の定形石器も多い。23-21Gでは松脂岩の石核・剝片・削片が集中している。

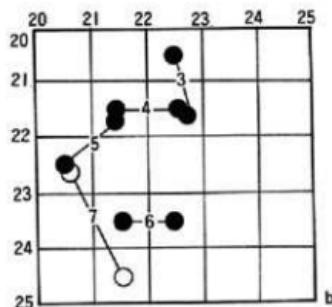
土器片を中心にして接合関係で遺物の動き（第6図）をみると、皿形の土器（aの1=第16図8）や、壺形土器（aの2=第11図36）のように20m余り離れたものが接合する例がみられる。g 大Gでも遺物の動きが割合にみられる。精製土器を主にして動きをみていくため、他の土器・石器類がどのようになっているかは不明であるが、g 大G内の土器の動きは、おおよそ地形の傾斜に沿う傾向がみられるようである。

※ a・b・c・d・e・f・g 各大グリットの大グリットは大Gの略語で統一する。たとえば

a 大グリットは a 大Gとなる。



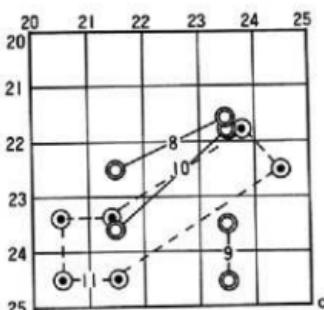
a



b

- 臨
- 浅鉢・皿形土器
- ◎ 鉢形土器
- ◎ 注口土器

——同一個体で接合したものと示す。
 - - - 同一個体と考えられるが接合のできないものを示す。



遺物の地点はそのグリッドの中心で
代表した。

第6図 遺物接合概略図

III 繩文時代の遺構と遺物

1 遺構

1) 土 壤

◎ 1号土壤 (SK1) (第7図)

22-18・19Gで検出された土壤である。プランは第IV層上面で確認し、長径94cm、短径77cmを測り円形を呈する。深さは約40cmを測り底面には5個の礫が配されている。底面からは繩文時代後期の土器片が出土している。

土層断面に表われているようにSK1をSP2が切っており、土壤とビットの関係はほとんどがこの新旧関係を保有している。

◎ 9号土壤 (SK9) (第7図)

22-18Gで検出された土壤である。プランは第IV層上面で確認し、長径95cm、短径82cmを測り円形を呈する。深さは26cmを測り底面に小さな礫が配されている。底面及び覆土から後期の土器片が出土する。

◎ 11号土壤 (SK11) (第7図)

22-18・19Gで検出された土壤である。プランは第IV層上面で確認し、長径100cm、短径84cmを測り円形を呈する。底面に薄くヌルヌルした粘着性のある暗青褐色土が薄く堆積している。底面や覆土からは後期の土器片が出土し、2個の円礫が認められた。

◎ 12号土壤 (SK12) (第8図)

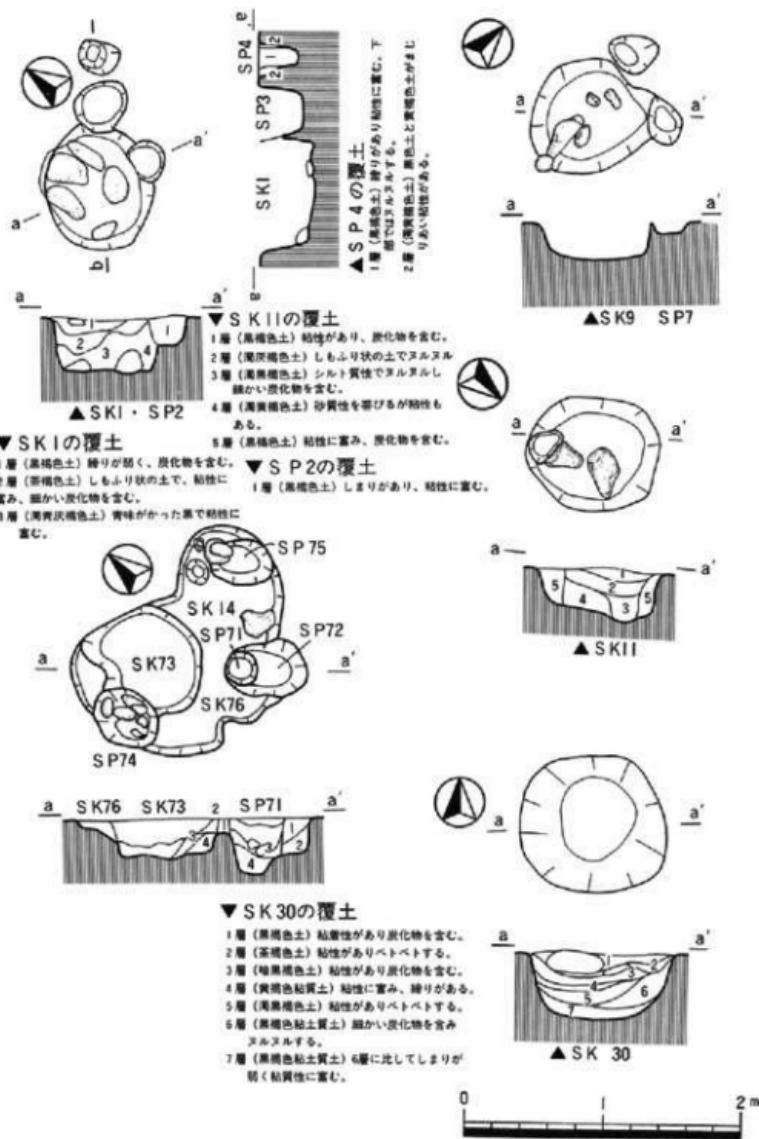
23・24-17Gで検出された土壤である。第V層上面でプランを確認する。長径200cm、短径96cmを測り長楕円形を呈する。深さは20cm前後で、長径東側にあるSP77が切り込んでいる。覆土には小砂利が多く含まれており、磨滅した土器片が出土する。

◎ 14号土壤 (SK14) (第7図)

26・27-18Gで検出された土壤であるが重複が著しい。ビットが2基以上、土壤が3基以上重複していると考えられる。SP71・74は平面プラン確認の際、土壤を切り込んでいるのがわかり、土層断面にも表われている。平面図では掘り過ぎのため図上には表わされていないが、土壤の新旧関係は古い方からSK75→SK76→SK73の順に構築されているようである。SK14の深さは10cmほどで楕円形のプランを呈すると考えられる。底面から後期の良好な土器が出土する。

SP74は深さ70cmを測り、覆土からは磨滅した土器や小礫が多数出土する。

◎ 30号土壤 (SK30) (第7図)



第7図 土 壤(1)

27-18Gで検出された土壌である。プランは第VI層で確認する。径110cm前後の円形プランを呈し、深さ50cmを測る。壁面が垂直気味で底面はいくぶん擂鉢状を呈する。覆土第V層は黄褐色粘質土で粘着性が非常に強い。後期の土器片とスクレイバー2点が出土する。

深く掘りこまれているせいか、数時間で水を湛え、後日埋めもどされるまで水が枯れることはなかった。

◎32号土壌（S K32）（第8図）

24・25-17・18Gで検出された土壌である。プランは第IV層で確認する。長径197cm、短径120cmを測り楕円形を呈する。底面は擂鉢状になり、径40cm前後のピットがみられる。

深さ33cmを測り、覆土からは後期の土器片を中心に、晩期の破片が少数出土する。石器では石製円盤が1点出土する。

◎45号土壌（S K45）（第8図）

27・28-16・17Gで検出された土壌である。プランは第V層で確認する。長径88cm、短径78cmを測り円形を呈する。深さ10~20cmを測り、底面は平坦で6個の礫が配されている。

◎48号土壌（S K48）（第8図）

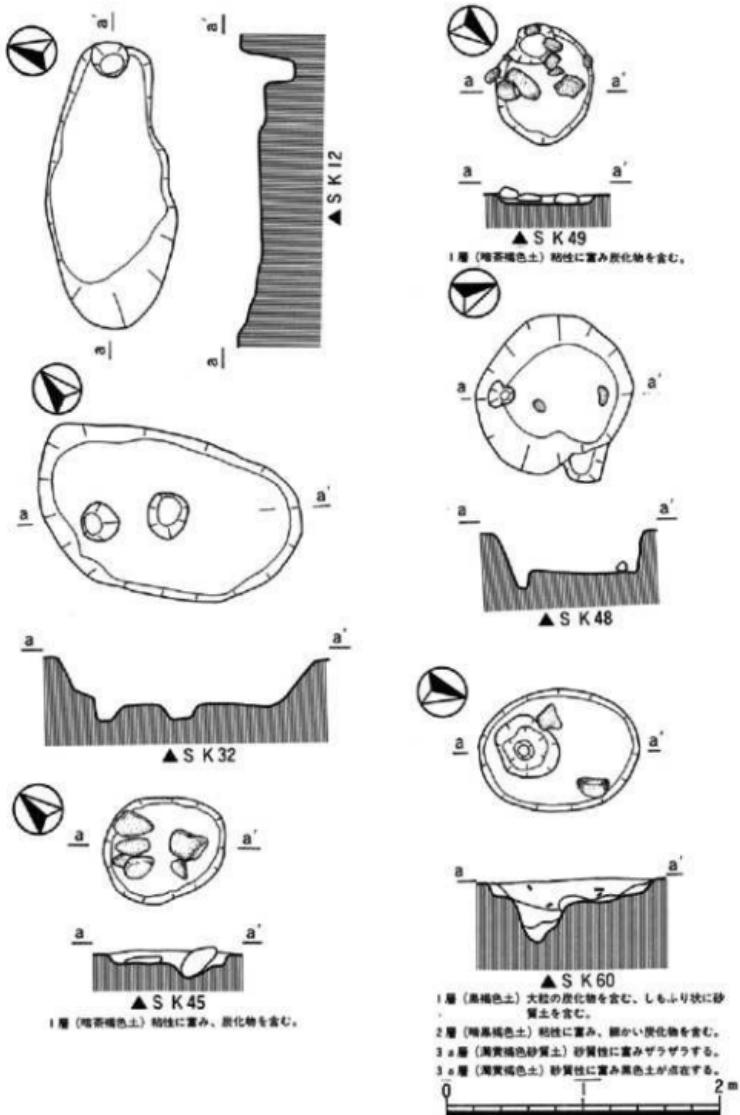
27・28-16・17Gで検出された土壌である。プランは第V層上面で確認する。径115cmを測り円形を呈する。壁は東側は垂直気味で、西側がやや緩やかになっている。底面は平坦で2個の小礫が確認された。

◎49号土壌（S K49）（第8図）

27・28-15・16Gで検出された土壌である。プランは第V層上面で確認する。長径90cm、短径70cmを測り円形を呈する。底面は平坦で大小様々な礫が配され、南側に浅い落ち込みがみられる。45号土壌と同様に浅い土壌で遺物はみられない。

◎60号土壌（S K60）（第8図）

25・26-18・19Gで検出された土壌である。第V層上面で確認する。長径120cm、短径90cmを測り楕円形を呈する。底面は平坦で2個の礫がみられ、南側に深さ30cmほどの擂鉢状の落ち込みがある。後期の土器片や二次加工のある石器が出土する。



第8図 土 壤(2)

2) 石組遺構（第9図）

石組遺構ははっきりしているものが4基検出されている。いずれもg大Gであり第III a層を主体にして出土した大洞C₂式土器群の下位の層、第III b層内に包含されていた遺構である。一部の石組は土器群等とともに上端をのぞかしていたが、全体が明らかにされたのは第III b層下部である。これらとともに出土した遺物は少ない。

1号石組21-24 Gで検出された石組である。構築面は第III b層下部あるいはIV層上面である。下に径45cm程の丸い平坦な一枚石を敷き、その土に平坦な礫を重ねたり、或いは垂直に立てて内部に狭い空間をつくり出している。その周辺には小礫が多くみられ土器の破片が散見できる。全体的に円形のプランで径70cmを測る。下に敷かれている一枚石は2つに折れている。使用されている礫は円礫が多いが、少数角礫がみられる。

内部の土層は、黒褐色をした粘質性の富むもので、明らかに第III b層とは異なる。小さな骨や、骨粉を少量含み、焼土や灰は全くみられない。

2号石組 22-24 Gで検出された石組である。構築面は第III b層下部にある。下に長短軸30cmほどの平坦な一枚石を敷き、その上にもしくは周辺に礫が丸く配されている。径60cmを測り、円礫が多い。内部の土層は、黒褐色を示し粘質性に富み、骨粉が少量みられる。焼土や灰はなく土器片が数点出土する。

3号石組

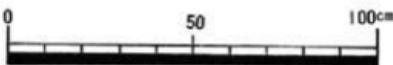
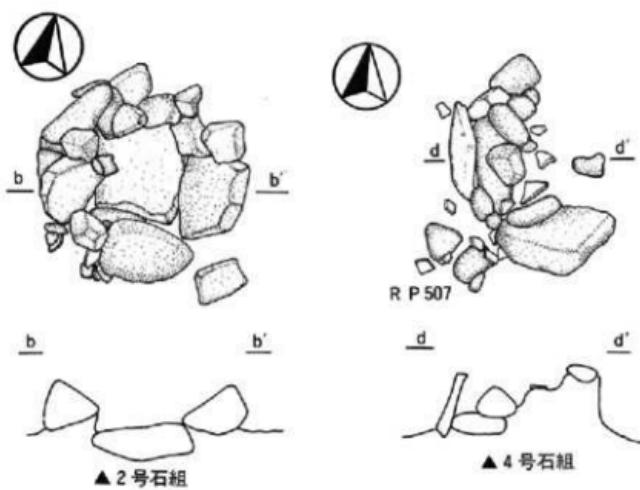
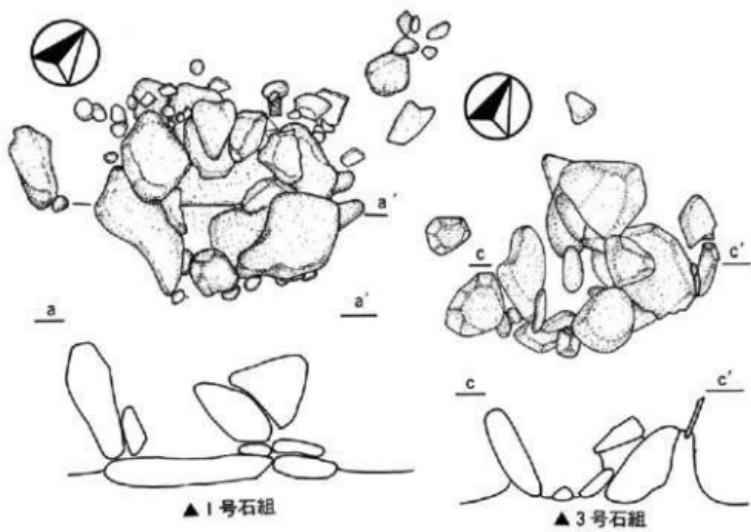
22-22 Gで検出された石組である。下には1・2号のように一枚石は敷かれていらないが大きい平坦な礫を垂直に立てて円形に組まれている。径60cmを測り、内部は黒色土で粘性に富むしまりのあるもので、骨粉を少量含む。土器片が数点みられる。石組の南側に何かを形どった土製品が出土する（R.P. 507）。

4号石組

20-24 Gで検出された石組である。S D 58の溝状遺構によって半分が壊わされている。構築面は第III b層下部にあり、推定径60cmを測る。大きな平坦な礫を垂直に立てて組まれている。内部の土層は暗茶褐色土で粘性に富み、炭化物を含む。

これらの他に、配石を思わせるような石の配列もみられるが、調査進行中に取り上げた礫も多く不明確である。

これらの石組遺構に共通するのは、平坦な礫を垂直に立てたり、重ねたりして丸く石を組むことで、中央に小さな空間を作り出している。（大きさは径40-60cmの小さな石組である。）中の覆土は、黒褐色土の粘性のある土壤で少なからず骨分を含んでいることなどである。



第9図 石組造構

2 遺物

漆坊跡の整理にあたり、実質的に行なわれたのは A 地点 c · d · e · f · g 大 G で、これらの大 G も充分な整理・分析ができたわけではない。ここでは e · g 大 G 中心にして報告するため不備な点が多大目につくと思うが、ご容赦願いたい。

A 地点の遺物は、整理箱にして約 150 箱分である。そのうち完形または推定復元できたものは約 90 点である。精製・半精製土器が多く復元され、粗製は手つかずのものが多い。

土器は縄文時代後期と晩期の型式がみられるが後者が主体である。

1) 土器

第 I 群土器 (第 10 図 10 ~ 16 · 28 · 29)

地文に縄文や撚糸文を施文し、沈線文を主体にして構成するものを本群とする。地文は撚糸文が多く縄文は僅かにみられる。

10 · 12 · 29 は SK 30 の覆土内から出土したもので、他は g 大 G から出土したものである。

10 · 14 ~ 16 のように 3 ~ 5 条の垂下する沈線文や、13 のように渦巻文を施文した文様がみられる。

文様は破片のため具体性に欠けるが、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は暗黄褐色を呈するものが多い。

第 II 群土器 (第 10 図 1 ~ 3 · 5 · 7 ~ 9)

地文に縄文が施文され、やや太目の沈線によって磨消縄文が構成されるものを本群とする。

1 ~ 3 · 5 は同一個体で、器形は口線がゆるやかな波状を呈し、頸部でくびれ、胴部に幾分ふくらみをもち底部に達する深鉢形の土器と考えられる。

文様は口線に沿ってめぐる沈線と、胴上半に横位にめぐる沈線の間に磨消縄文が展開される。沈線文が連結する部分に円形の刺突文が配されている。胴下半は縄文で覆われる。

9 は充填縄文である。胎土は緻密な方で、焼成は良好である。色調は赤褐色・暗褐色を呈する。

第 III 群土器 (第 10 図 4 · 6)

地文に縄文を施文し、横走する沈線と磨消縄文で構成されるものを本群とする。2 点とも g 大 G から出土する。小破片であるため、全体の器形は不明確であるが、4 は口線から胴上半に平行沈線をめぐらせ、頸部を磨り消している。また、口線直下の平行沈線文が、垂下する曲線で区切られている。6 も同様な文様帯をもつものと考えられる。胎土に砂粒を含むが焼成は良好である。

第 IV 群土器 (第 10 図 17 ~ 26)

地文に縄文を施文し、大ぶりの磨消縄文を中心として構成されたものを本群とする。

1 a 類 (第10図17)

g 大グリットより出土したもので1片確認している。器形は不明確であるが、太目の沈線で繩文を区画し磨り消した後、繩文が施文された側に沈線に沿って円形の連続刺突文を施している。胎土は緻密で焼成は良好である。

1 b 類 (第10図18~23・25・26)

地文に繩文が施文され、大ぶりの磨消繩文で構成されているものを本類とする。g 大グリットから出土した破片を拓影化している。器形は口縁が大きな波状となり、外反気味に開き、頭部でくびれ胴部が幾分ふくらみをもつ深鉢形土器と考えられる。19・21・26は口縁に沿って無文帯が巡るもので、20・25は口唇にまで繩文が施文されている。23は小突起をもつもので頂部に大きな刺突がみられる。20・21・26は充填繩文である。胎土に小砂を含むものの堅緻で焼成は良好である。

第V群土器

地文に撲糸文が施文され、或いは無文・沈線文をもつものを本群とする。さらに4類に細分する。

1 a 類 (第10図30・32) 外面に撲糸文が施文され、内面に沈線文を有する土器である。器形は口縁が平縁で内湾気味の深鉢形土器と考えられる。内面に太目の沈線が格子目状に施文される。胎土は砂粒を含み荒いが焼成は良好である。器壁は他の土器群に比べて厚く10~13mmを測る。30はSK14の覆土から、32はg 大Gからそれぞれ出土する。

1 b 類 (第10図31) 外面が無文で内面に太い沈線文が施文される土器である。g 大Gから數点出土する。器形は1 a 類と同様なものと考えられ、口唇が尖り気味であり、内面にみられる沈線は格子目状になるとされる。

1 c 類 (第10図24) 地文に撲糸文が施文されている土器である。g 大Gから1点出土する。器形は緩やかな波状を呈する深鉢形土器と考えられる。胎土に砂粒を含み焼成はあまり良くない。内面に炭化物の付着が著しい。

1 d 類 (第10図27) 沈線文のみで施文されている土器である。g 大Gから出土する。器形は口縁が平縁で内湾気味の深鉢形を呈すると考えられる。沈線文は、円文、孤線を主体としているが粗雑な施文である。胎土は緻密な方で焼成は良い。

第VI群土器 (第11図34~38)

羊歯状文を有する土器を本群とする。地文に結束のない羽状繩文や斜繩文を施している。34・35・37・38は鉢形土器で口縁部に羊歯状文が施されている。36は壺形土器で肩部に羊歯状文がみられる。36以外は崩れかけた文様で力強さを失う。またこの壺形土器はe 大Gとg 大Gから、バラバラに出土したもので、肩部付近がすべて接合する。

第VII群土器

いわゆる x 字文や大腿骨文などの雲形文を中心に施されている土器を本群とする。3類に細分する。

1類（第11図44～48・第16図8）皿形土器を本類とする。口縁が44・8のように外反するものや、45～48のように内湾するものがある。8は大きい底部をもち安定している。全般的に体部に展開する磨消繩文は、半肉彫り的なものが多い（44・48・49・8）。

8は体部に複雑な x 字文が展開する。口縁上端が突起状に波打ち、口唇に三又状の沈刻が施されている。

44は体部に大腿骨文が展開するもので、口縁部内面に沈刻がみられる。45・46は口縁内面に連続刻目文がめぐる。48の口縁部には黒漆が残存している。

2類（第11図40、第16図11～13）台付鉢を本類とする。体部にはやはり皿形と同じような文様が展開するが、大腿骨文が多く用いられている。

40は地文が無文で体部上半に x 字文が展開する。11は口縁上端が突起状に波打ち、4単位の大脛骨文がみられる。12は内湾する台付鉢で1個の目立たない小突起が口縁に付く。口唇には太目の刻目がめぐる。13は外反気味で、口縁が小波状になるとされる。口唇には沈線がめぐり、体部の大脛骨文はくずれかけた様相をみせる。

3類（第11図41）瓣形を呈した土器で、このような器形をもつ土器に文様帯がみられるものはあまりないようである。地文は無文地で口縁は平縁である。口縁と頸部の沈線で区画された中に、x字状の文様が展開する。胎土は緻密で焼成は良好である。

4類（第19図26）徳利形を呈した土器で、口縁部が無文帯となり、胴部との付け根に短い沈線が、横位に途切れ途切れにめぐる。直下には2条の沈線があり、体部はLR繩文で覆われる。

第VIII群土器

x字文や大腿骨文などの磨消繩文がくずれ、半肉彫的な要素も薄くなり、曲線的な文様から直線的な文様が多くなっている土器を中心にして本群とする。

1類（第11図49～54、第12図56・57、第15図2～5、第16図9・10）皿形の土器を本類とする。これらはg大Gから出土したものがほとんどである。

器形は胴部にややふくらみがあり、口縁が内湾気味のものが多く、底部が大きく安定する。地文はLR繩文が多用され、体部に直線化した磨消繩文がみられる。第16図10は充填繩文の手法をもつ土器である。

口縁部に小突起をもつもの（51・3～5・10）、小波状になるもの（2）、太目の刻目が施されるもの（49～54・56・57）などがみられ、口唇に沈線文をめぐらすものが多い。

また、内面の胴下半部から底辺部にかけて、帯状の突帯をめぐらすもの（52～53・5）、帯状の突帯に斜縞文を施文するもの（49・50・3・5）、単に沈線をめぐらすもの（10）などがあり、帯状突帯に施文される縞文は地文と同じLR縞文である。

1 b 類（第23図46・47）皿形の土器で磨消縞文がみられないものを本類とする。46と47は口縁部がやや外湾氣味で、口縁に目立たない小尖起を有する。口唇に沈線が施され、口縁部には3条の平行沈線文がめぐり、底面は沈線で区画される。

2 a 類（第15図1・6）浅鉢形土器を本類とする。口縁が内湾し小さい底部をもつものが多い。

1は口縁部に太目の刻目を施し、体部が1～2条の沈線で区切られ、なかに直線化した磨消縞文が展開する。胴以下は無文地となっている。底辺部に3条の沈線をめぐらせ、底部と区切っているが、丸底風で安定性に欠ける。底辺部に補修孔がみられる。

6は平縁で、口縁に2条の沈線をめぐらせ、体部から底辺部にかけて磨消縞文が展開する。体部なかほどに補修孔がみられる。

2 b 類（第17図14）口縁部に2個一対の突起を有し、口縁部に2条の平行沈線がめぐり、それ以下は縞文が施文される。口唇や口縁部内面に沈線がめぐる浅鉢形土器である。

3 a 類（第12図63～67、第15図7、第18図19・20）鉢・台付鉢で磨消縞文などの文様帶をもつものを本類とする。口縁から頸部にかけて、かるく「く」字状に外反し、口縁部に1個の突起を有する（65・19・20）。20は口縁が内湾し、1個の大突起とともに、2個で一対をなす小突起が七対口縁部をめぐる。

頸部と胴部との境目には、いわゆる眼鏡状浮文がめぐり（19・20・63・64・67）、その間には2個で一対の小突起がつく。口縁内面には沈線文が施される。

体部の磨消縞文は横位に流れ、直線・平行化が進むようである。7は体部に磨消縞文が展開しそれ以下は無文地となる。19は体部磨消縞文の地文がRL縞文で、それ以下はLR縞文が施文されている。20は撚りは同じ（LR縞文）だが、撚りの細かいものと、粗いものを使いわけている。

3 b 類（第13図82・88・96、第20図31・33、第21図40）、口縁部が「く」字状に外反し平行沈線間で挟まれた中を、連続刻目文や連続刺突文でうめる鉢形土器を本類とする。

口縁は平縁のもの（82・88・31）小波状を呈するもの（33）がみられ、口唇部や口縁内面に沈線を有するものが多い。

刻目文は連続文になるが、ほぼ一定の間隔で狭い空白帯を数ヶ所にみられるものが多く31の連続刺突文にはそれがみられない。胴部以下は無結束の羽状縞文が施文される。

31・33は内面に丁ねいな整形痕を残す例で、口縁部は横方向に整形し、その後縦方向に

整形している。全般的に胎土は緻密で、焼成は良好である。

3 c 類（第11図80・83・85、第20図32、第21図35・36・38、第22図45、第23図48）、鉢形土器で口唇部に刻目があり、口縁に2~3条の平行沈線をめぐらし、胴部以下が纏文で覆われる土器を中心にして一括する。

口縁が「く」字状に外反し、小突起を有するもの（32・38・45・48）口縁が内湾気味のもの（80・85）などがあり、口縁内面に沈線をめぐらすものが多いようである。

3 d 類（第22図44、第23図49）文様がなく無文地の鉢形土器を本類とする。いずれも小型の鉢で、口縁部がかるく外反する。底部が張り出し気味である。胎土は割合緻密で焼成は良好である。

4 類（第18図16~18）注口土器を本類とする。g 大Gから出土したものがほとんどで26個体の破片を確認している。特に23~22 Gでは7個体の破片が出土している。図化したものはその中でも良好な資料である。口縁が大きく立ち上がり、底部が小さい注口土器である。16は胴部を失い、17は口縁部を失う。文様は口縁部にはちまき状の磨消纏文が4単位で展開する。破片もこの種の磨消纏文がほとんどで、器面全体に朱を残すものが多い。

胴部には流れるような磨消纏文が展開する。17は注口部付け根にアスファルトが付着している。

5 a 類（第12図58~62、第19図22）壺形の土器で磨消纏文が展開されているものを本類とする。胴部が丸味をもち肩部中心に磨消纏文が展開する。胴部以下は斜纏文となるものが多い。

59・61~62・22は中型の壺で、細目の沈線を主体に横位にめぐらされた3条の平行沈線、それを短い3条の沈線が区切る。62の柱状磨消纏文など直線化した文様帶が多い。

58・60は大型の壺で太目の沈線で文様が構成される。58は磨消纏文による入組工字文が施文され、60は肩部や肩部付け根に連続刻目文がめぐる。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。

5 b 類（第19図21・24・25、第20図29・30）壺形土器で口縁部が無文帶で、肩部付け根に1~2条の平行沈線文がめぐらされ、それ以下は纏文が施される。胴部が大きく丸味をもち、頭部が直立ないしは内傾し、口縁が外反する。口縁部内面には沈線をめぐらす例が多く、口縁が大きい広口壺風である。

地文は無結束の羽状纏文（29・30）や斜纏文が施されている（21・24）。25は口縁に1個の突起を有し、肩部にLR纏文が2段、それ以下はRL纏文が施文される。

5 c 類（第20図28）無文の壺形土器を本類とする。28は細口壺で胴部が球状に丸味をもつ。口縁部を欠損するが薄く丁ねいなつくりで、頭部付け根に1条の隆帯がめぐる。内面

をみると、胴部と頸部を別々につくり、後でつなぎあわしている様子がみられる。

第IX群土器

いわゆる工字文の施文された土器を中心にして本群とする。a 大Gにおいて最も多く出土するが、e・f 大Gからも割合良好な土器を出土する。

1類（第12図68・69・71・72、第24図53・55～58）台付鉢を本類とする。69・71・72の破片は台付鉢の破片であるかは不明確だが、一応本類の中に含ませている。55は口縁部に入組工字文が施文され、58は台にみられる例である。

53・56・57は平縁で内湾気味の口縁であり、口縁部に直線的な工字文が施文される。それ以下は無文地となるものが多いが、56のように斜繩文を施文するものもみられる。台の部は平行沈線をめぐらすものや、工字文をめぐらすものなどがある。

2類（第24図54）工字文が施文された浅鉢形土器を本類とする。口縁が内湾気味で底部に4個のボタン状の脚が着く。

3 a類（第12図70、第24図52）壺形土器に工字文の施文されているものを本類とする。

70は胴部から肩部にかけて工字文が施文されている。52は口唇部に沈線がめぐり、平縁の口縁が大きく外反し、体部の張る壺で肩部に工字文が施されている。胴部以下は無文地となり朱が残っている。胎土は砂粒を多く含み焼成は不良である。

3 b類（第19図23、第24図51）無文の壺を本類とする。51は頸部が直立し胴部に丸味のある壺で、頸部付け根に2条の沈線がめぐる。作りは非常に丁ねいであるが、体部下半に梢円形の穿孔がみられる。

51は小形の壺で粗雑なつくりであるが、内面に朱が塗布されている。

4 a類（第12図73・75、第21図37）工字文の施された鉢形の土器を本類とする。口頸部がかるく「く」字状に外反するものが多い。73は口唇部に細かい刻目が施され、胴上半に工字文が施されている。口縁内面に沈線がめぐる。

75は口縁に小突起があり、頸部には連続刺突文が施され、その直下に工字文が施文されている。体部には稚拙な斜繩文が施文されている。

37はe 大Gから出土したもので、口縁部に大きな突起が4個みられ、それらの間にはさらに2個一対の小突起が配される。この土器の中から、底面にへばりつくようにして骨が1点出土する。

4 b類（第22図41・42）鉢・台付鉢の中で頸部に連続刻目文を施し、直下に2～3条の平行沈線文をめぐらすものを本類とする。

41は台付鉢で口縁が「く」字状に外反し、緩やかな波状になる。口唇部には断続的な短い沈線が施されている。口縁内面には沈線がめぐる。胴部は無結束の羽状繩文が施文され

る。42もほぼ同様な文様がみられる。

4 c 類（第21図39）口頸部が「く」字状に外反し、頸部に3条の平行沈線をめぐらし胴部以下は斜繩文となる鉢形土器である。口唇に刻目が施される。

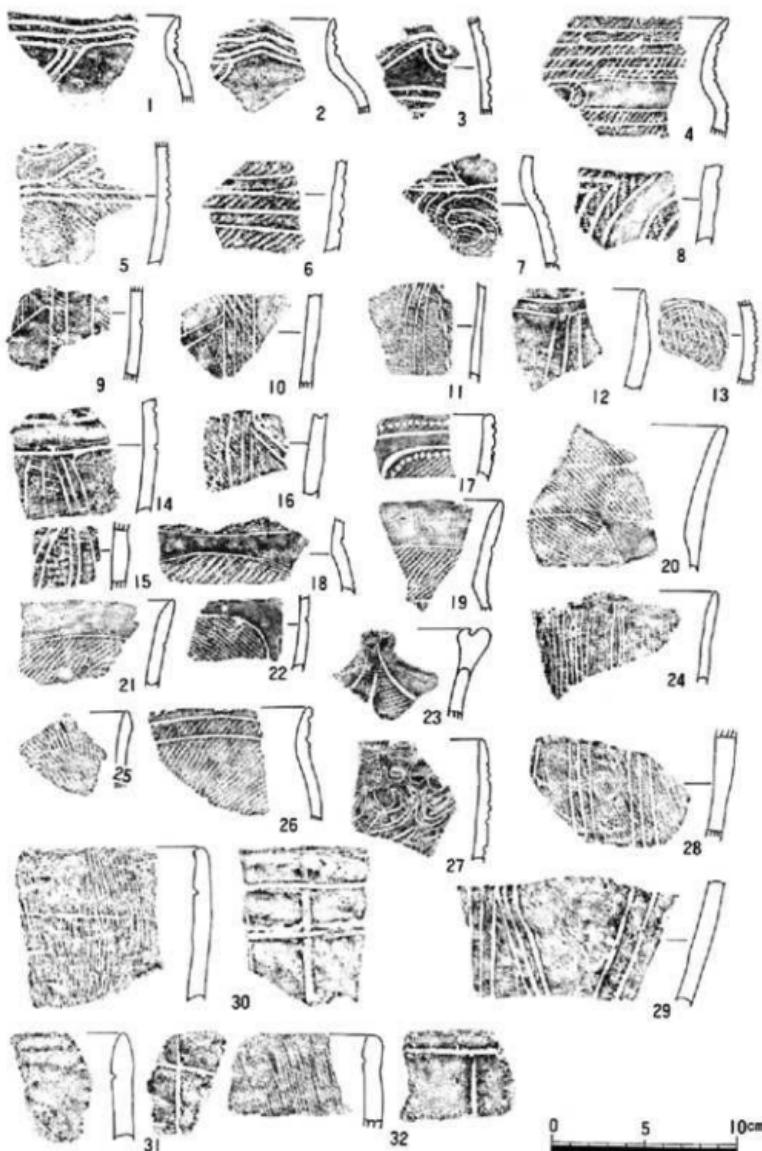
4 d 類（22図43）無文地の鉢形土器で、口頸部が「く」字状に外反し、口唇には太目の刻目がはいっている。胎土は砂粒を含み焼成は不良である。

5 類（第17図3）脚付土器を本類とする。e 大Gから出土したものであるが、他に a 大Gからも良好な脚付土器が出土している。

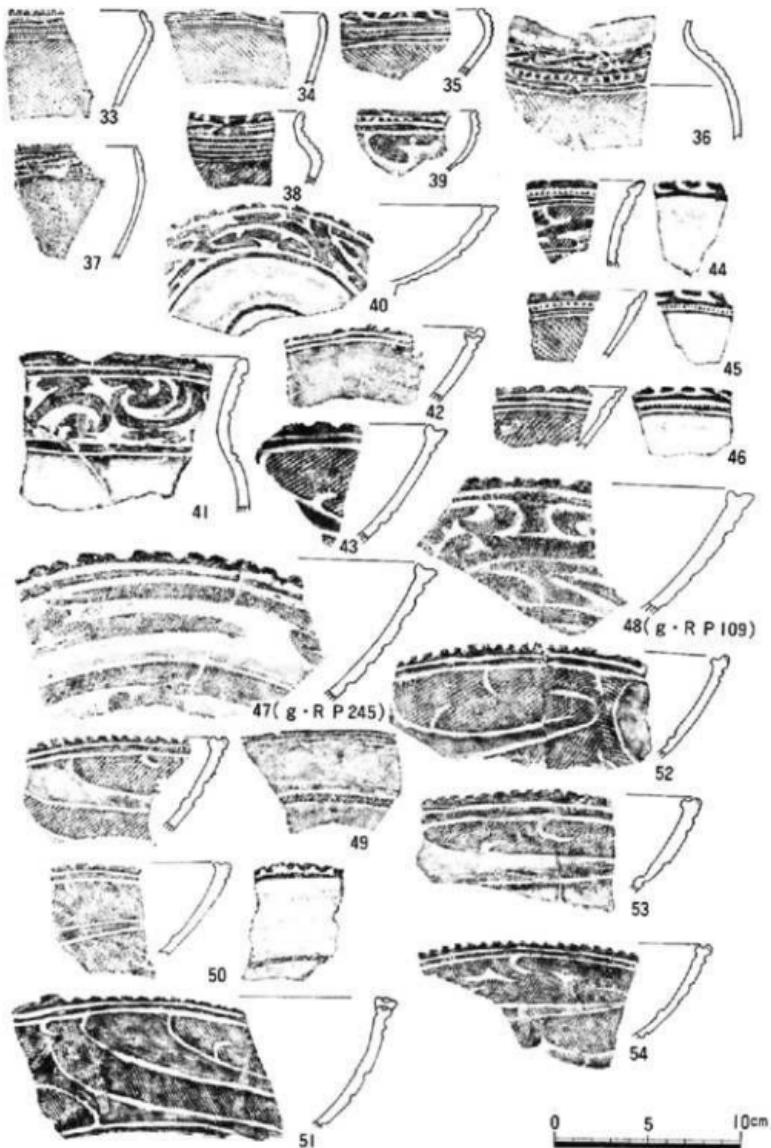
口径37cm、器高15cmを測り大型の土器である。脚は4個で方形に付き、周りを太い2条の沈線がめぐる。また脚は付け根から対角線状に沈線で結ばれている。

口縁部に1個の突起が付き、口唇部に刻目が施されている。口縁に4条の太い沈線がめぐり、それ以下は斜繩文で覆われている。

6 類（第12図74・76～71）大型の深鉢形土器及び、不明確な土器を一括する。破片からみると、径の大きい土器で瓊形や鉢形を呈するものと思われる。工字文風の文様がみられる破片が多く、口縁部から頸部に若干の文様が施文されるようである。



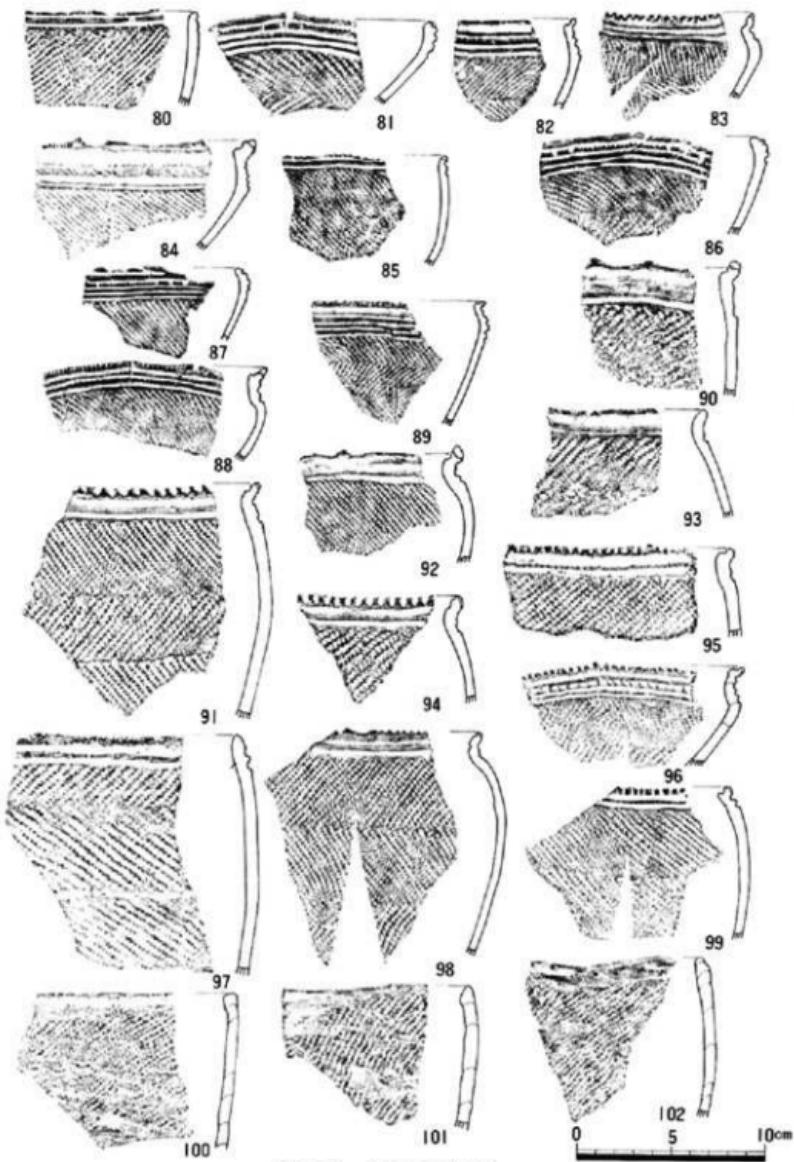
第10図 土器拓影図(1)



第11図 土器拓影図(2)



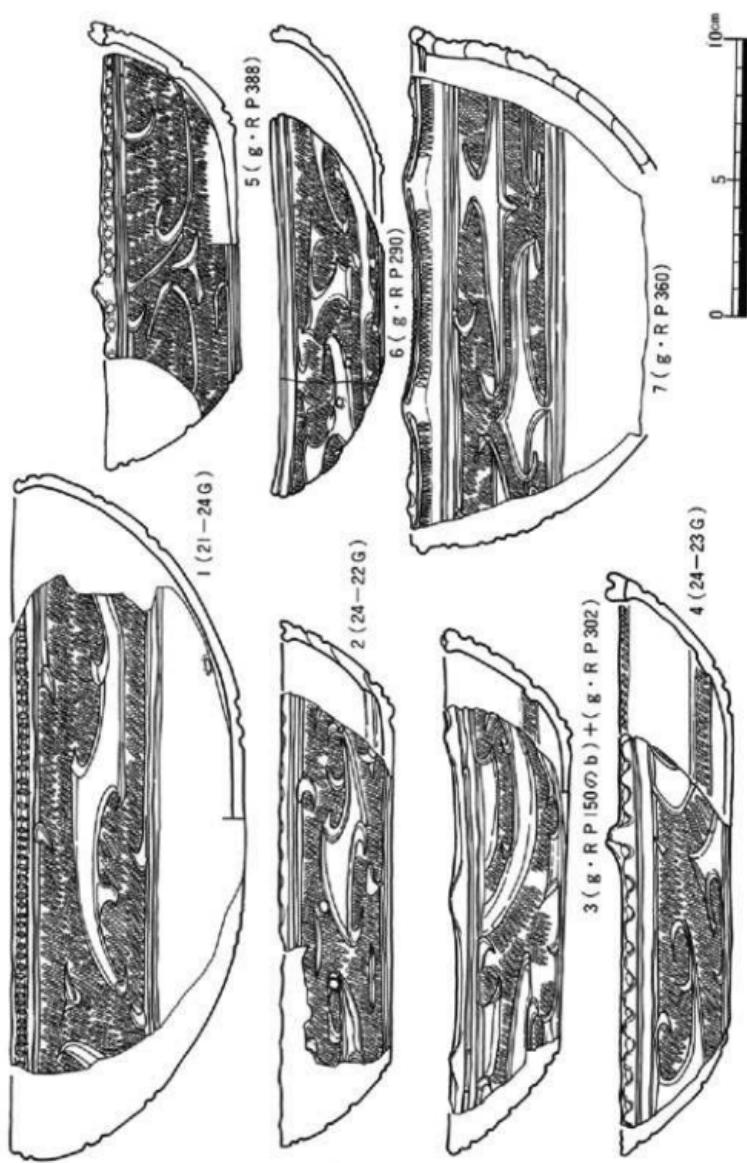
第12図 土器拓影図(3)



第13図 土器拓影図(4)

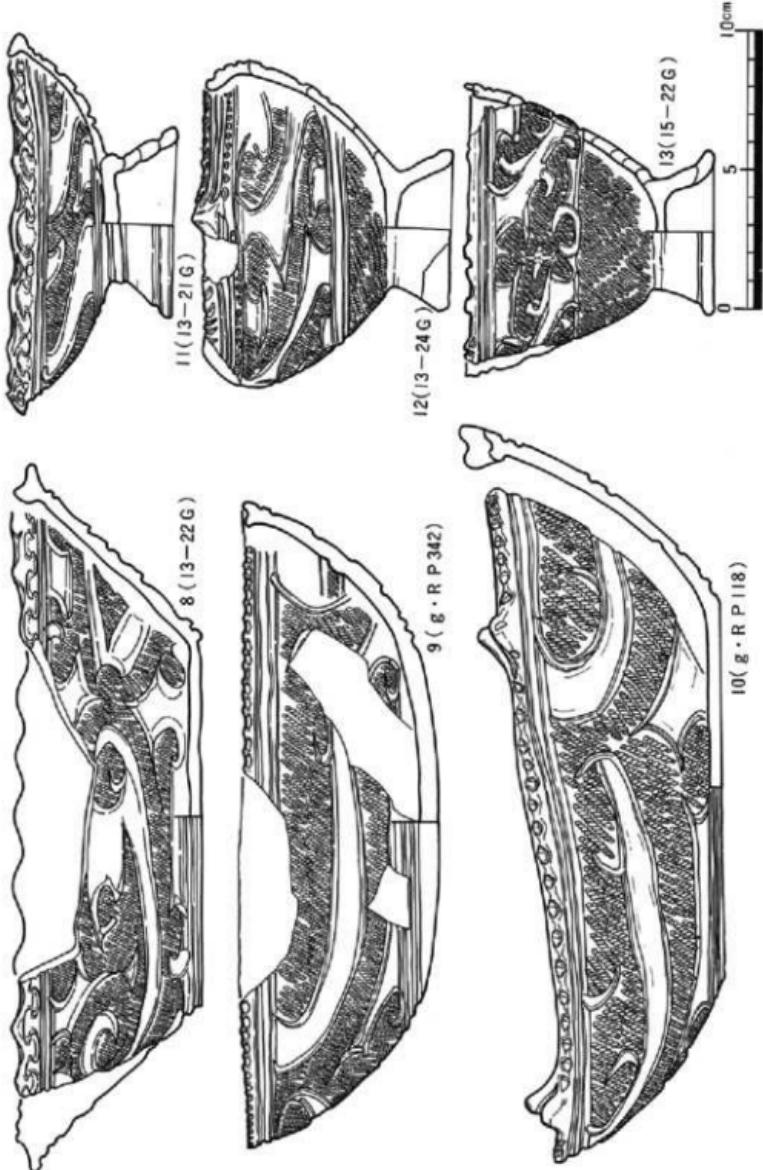


第14図 土器拓影図(5)

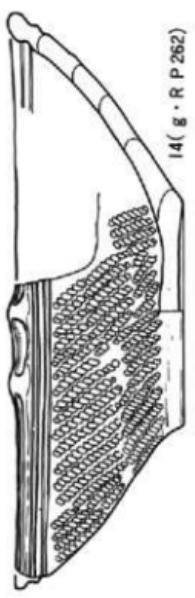
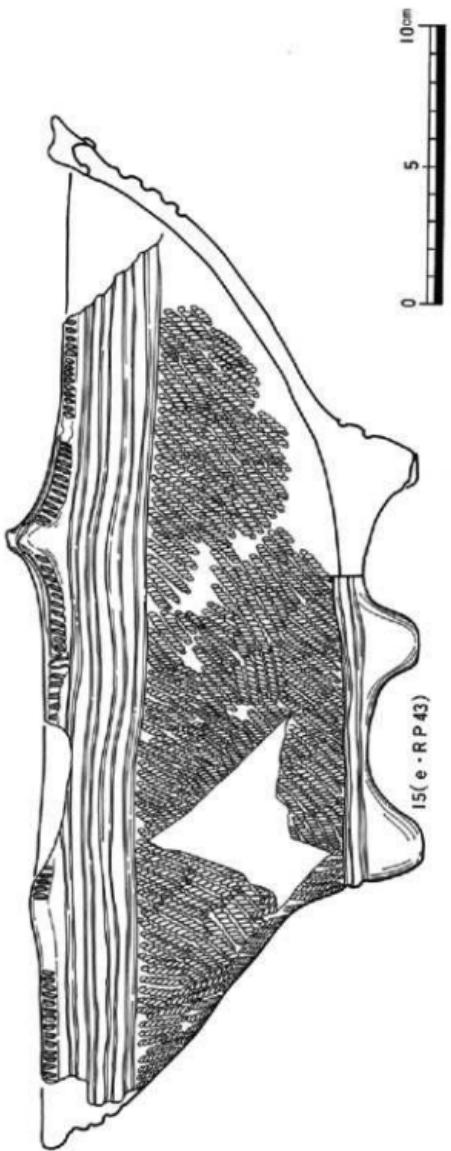


第15圖 土器測量圖(1)

第16図 土器実測図(2)



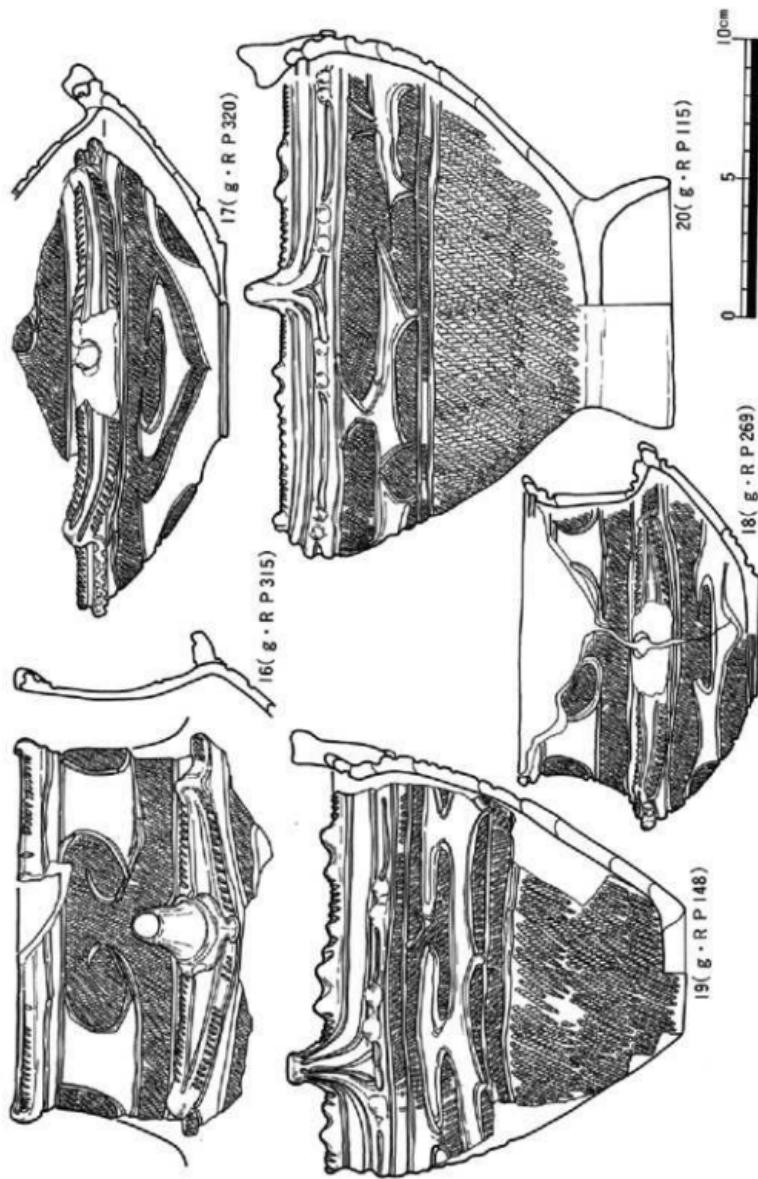
第17図 土器実測図(3)



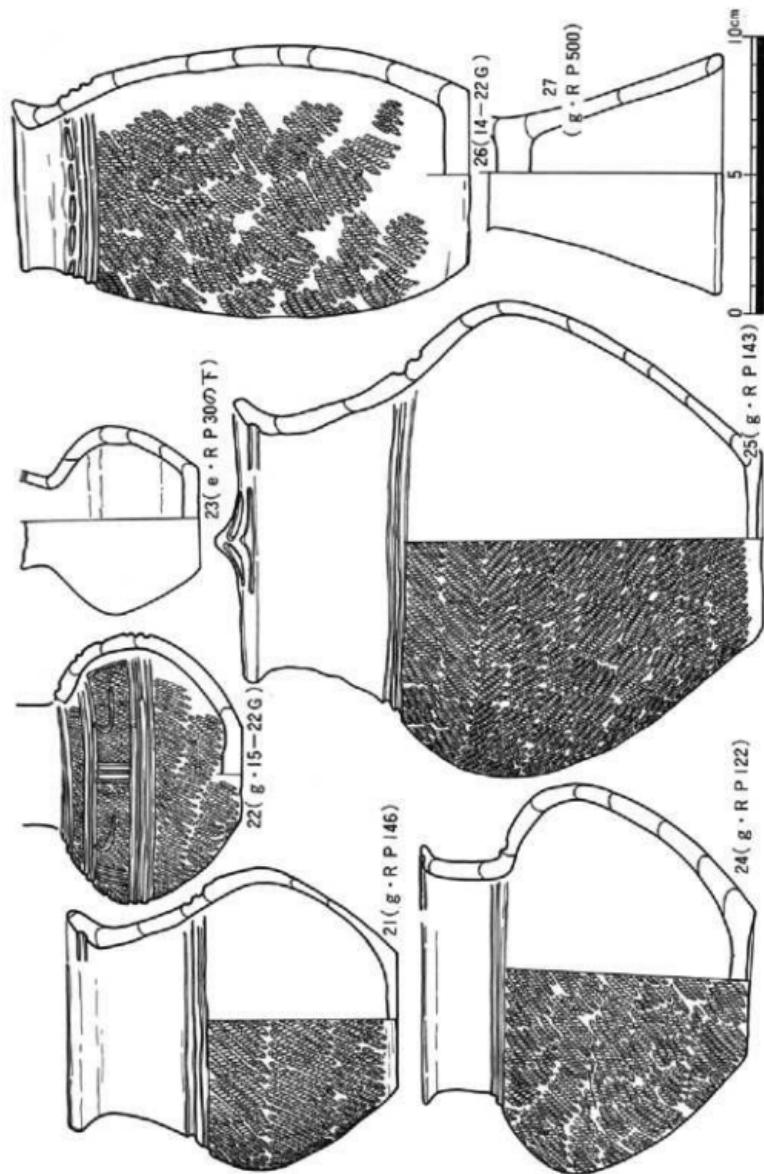
14(e · R P 262)

15(e · R P 43)

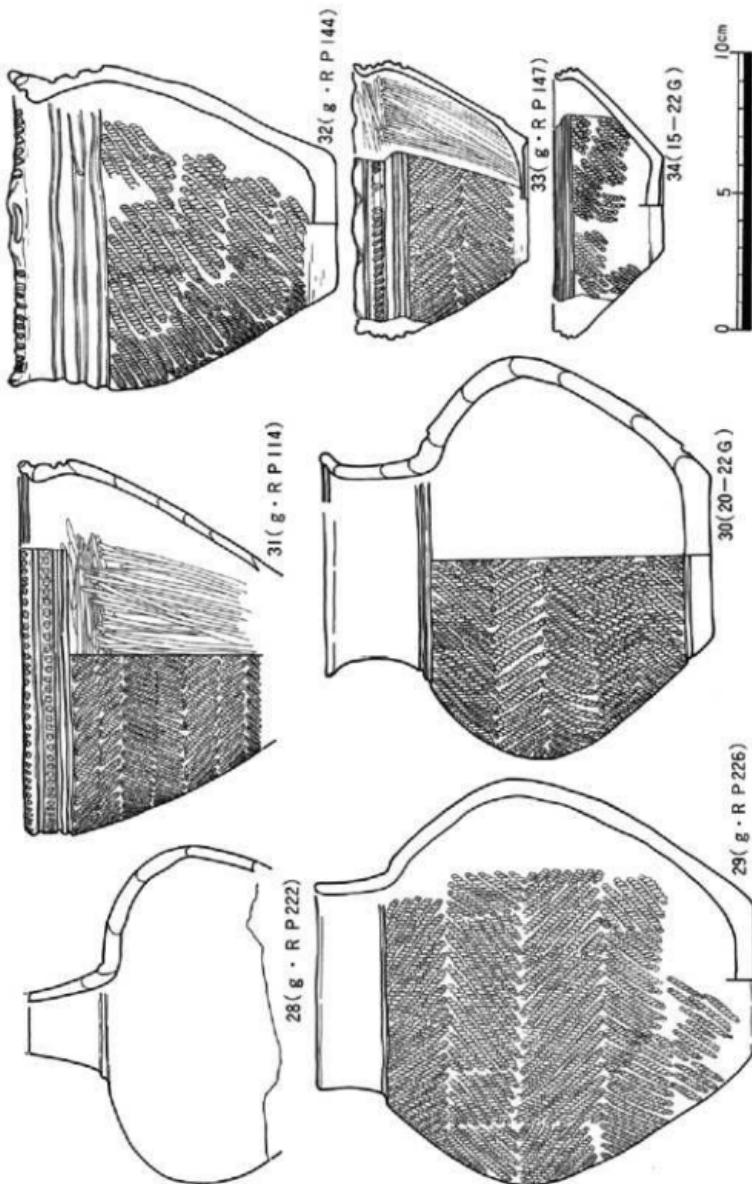
第18図 土器実測図(4)



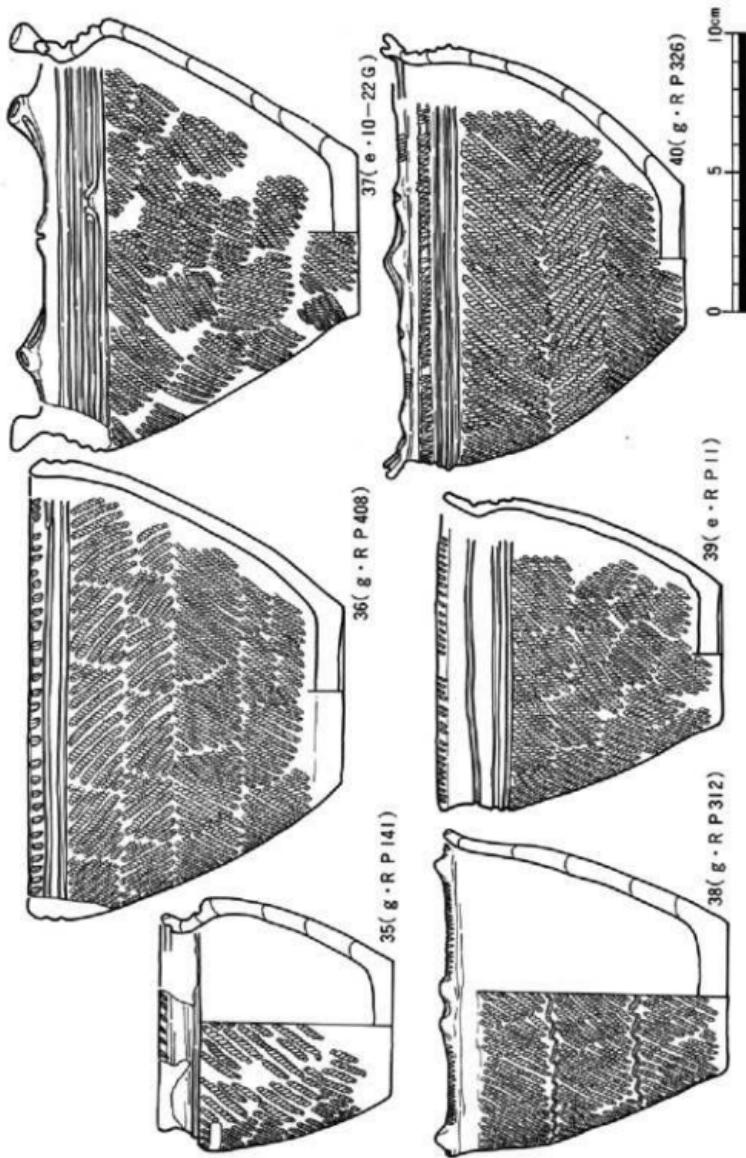
第19図 土器実測図(5)



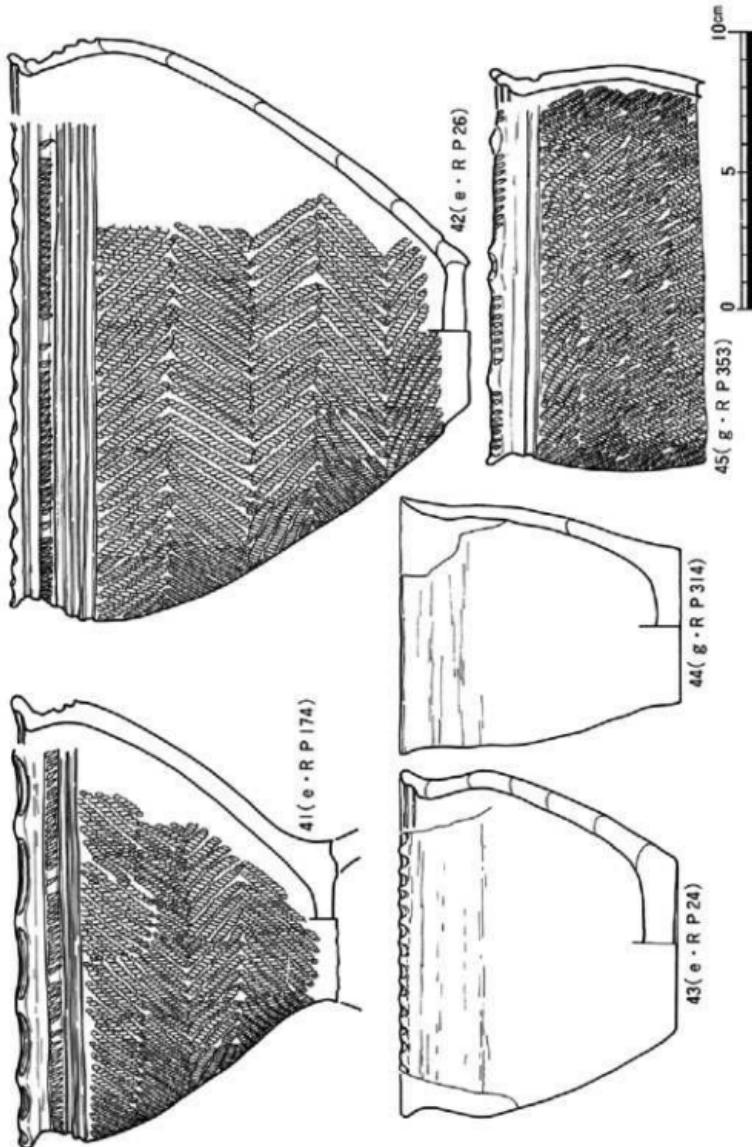
第20図 土器実測図(6)



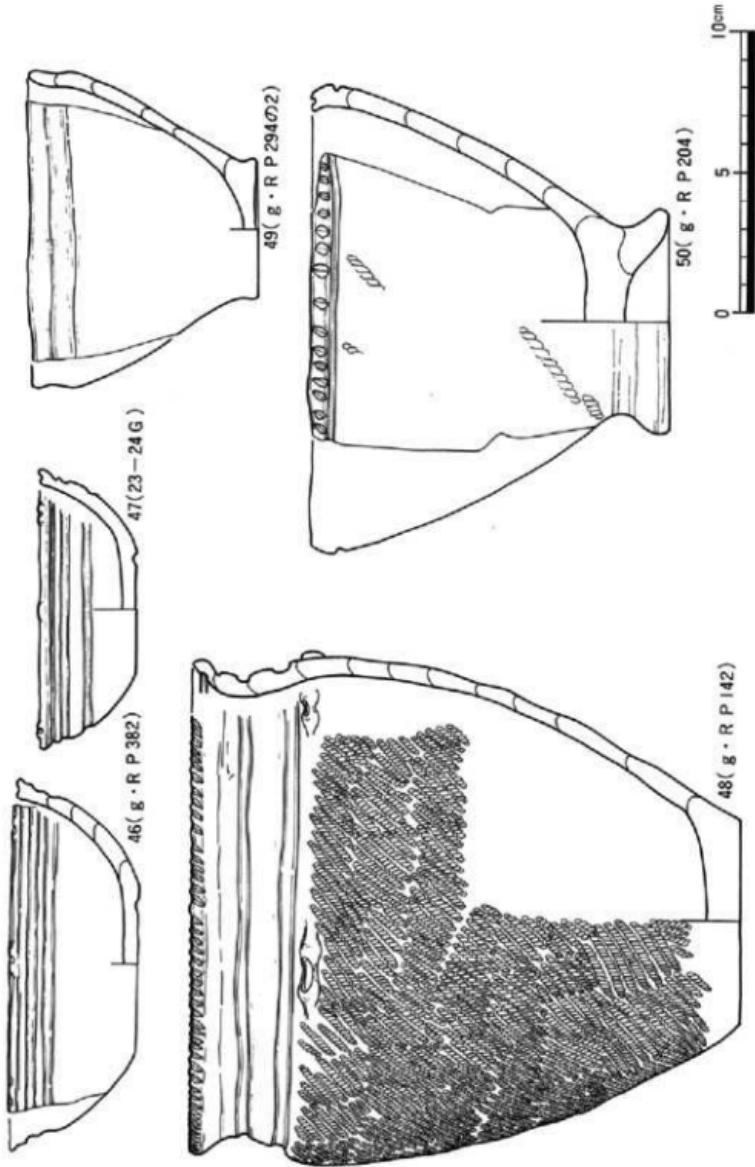
第21図 土器実測図(7)



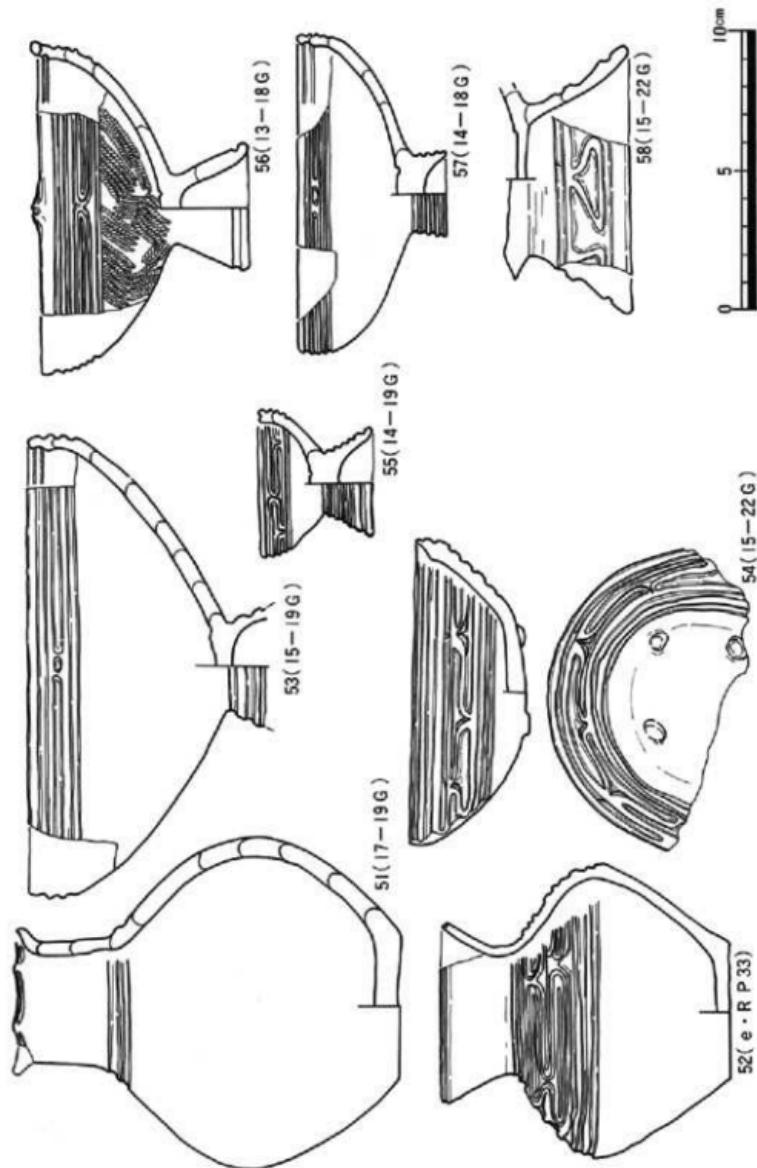
第22図 土器実測図(8)

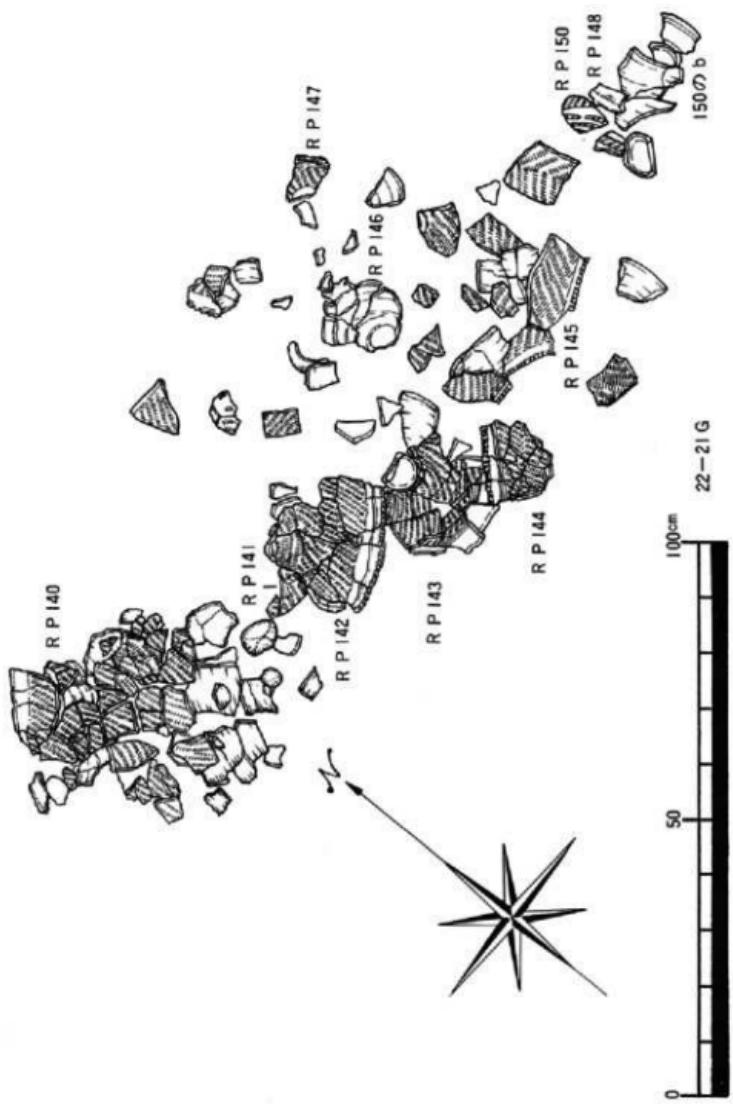


第23図 土器実測図(9)



第24図 土器実測図(1)





第25図 土器出土状況微細図

2) 石 器

〔石鎌〕(第26図1~15)

g大Gから43点出土している。ここでは各大Gから出土したものを図化する。6・8・10はa大Gから、3はb大Gから、1・2・13はe大Gから、4・5・7・9・11・12・15はg大Gからそれぞれ出土する。

形態的には、有茎石鎌・無茎石鎌・柳葉形石鎌などに分類できるが、有茎石鎌が圧倒的に多くみられ、無茎・柳葉形がわずかに出土している。有茎石鎌の身は基本的に二等辺三角形を呈するが、直線的なもの、外湾するもの、内湾するものなどのバラエティがみられ、茎にも、茎のつくり出しが不明なもの、長いもの、短かいなど変化に富むようである。

1~3は幅の割に身が長く、茎の作り出しが明確である。1は先端と欠い、3は尖頭部や基部の一部を欠う。

12は全体的に菱形を呈し、やや大きく身も厚くなっているのが特徴であり、出土数はあまり多くはない。

13は茎が明確でなく、両端が美事に磨滅しているので、石錐としても活用されている。15も石鎌であるが、先端が錐として使用されている。

14はいわゆる柳葉形石鎌と称されるが、この形態の石器は当遺跡の場合、先端がむしろ磨滅しているものが多くみられ、石錐として作られたとも考えられる。

〔石錐〕(第27図1~2)

1・2はa大Gから出土したもので、扇状のつまみ部を有し、錐部のつくり出しが長く断面が平行四辺形状を呈する。

〔石小刀〕(第27図3~12)

5~7はa大Gから、8・11はf大Gから、3・4・9・10・12はg大Gからそれぞれ出土している。つまみが作り出されるのは通常、主要剥離面側の打瘤がある部分を加工して行なわれるが、9・10・12のようにつまみの位置を別のところにつくり出す例もある。

刃部が長身の石小刀が割合に多く、4・6のように片面加工のものもある。7は一見すると縄文時代前期にみられる石小刀と酷似しており、押圧剥離が丁寧に行なわれている。また、両面とも側面加工だけが押圧剥離された面、及び主要剥離面とのバテナに明らかな光沢の差がみられ、再利用の石小刀とも考えられるが、即断はさけたい。

〔範状石器〕(第28図1~9)

漆坊遺跡で特徴的にみられた、範状石器を中心にして図化している。3・9はa大Gから、1・2はe大Gから、4~8はg大Gからそれぞれ出土している。

1~3・5は範状石器の素材となる剥片の面を特に刃になる部分を加工せず、側面加工

するだけで、そのまま生かして利用している例である。

3～5は側刃加工の場合、切断をした後プランティング加工を行なっている。5はその最も顕著なもので、この手法の笠状石器が目につくようである。2は側刃を自然面のある剝片で生かしている。3は切断後多少の加工を行なっているだけで、4は切断面に対する加工はほとんどないものである。刃部は2・3・5では直線的で、4では弧を描く。素材となった剝片は縦長剝片と横長剝片とがみられる。

6は切断ではないが素材の面を生かしている例で、基部から刃部に向って束広がりになつておる。横長剝片を利用している。

7は縦長剝片を使用し、側刃加工が丁ねいであり、刃部は押圧剝離の手法がみられ、搔器的なつくりである。

8・9は粗い側刃調整がみられ、刃部加工も割と粗い。横長剝片が使用されている。

〔磨製石斧〕（第29図1～7）

出土した石斧はすべて定角型磨製石斧で、このうち完形品は15～22Gからの1点だけ（1）である。遺存している部分は基部に近い方が多くみられ、刃部は少ない。また、5～6のような小形の石斧では刃部の遺存度が圧倒的に多い。

2は刃部欠損後、敲石にでも転用したものであろうか、破損面に敲打がみられる。

1のように両刃の磨製石斧に対し、小形磨製石斧は片刃的なものがみられ、石材も多少異なるようである。

〔石錘〕（第29図8）

偏平な円礫の両端と打ち欠いてつくった石錘は、10～18Gから1点だけ出土している。

〔石棒〕（第30図1～6）

完形品は出土せず破損品だけである。g大Gから最も多く出土し6点を数える。3はa大Gから、4はb大Gから、6はe大Gから、2・3はf大Gから、5はg大Gからそれぞれ出土している。

有頭のものと考えられるが画頭のものかどうかは不明確である。当遺跡の有頭の石棒は男根状に成形しているものの、沈刻は一切認められない。5・6は長軸に沿って欠損する。

〔石刀〕（第30図9・11・12）

完形品は出土していない。9・11はg大Gから、12はe大Gからそれぞれ出土する。いずれも内反りとなっており、背刃の部分には細い溝が掘り込まれている。12は珪化木で柔らかく、握手のような作り出しがある。

〔石剣〕（第30図7・8・10）

完全品は出土していない。図化した3点はg大Gから出土する。石剣は両刃を基本とす

るが、10のように鈍い刃をもつものや、7・8のように平坦な刃部をもつものなどがある。

7は有頭の石刀で溝が2条めぐらされている。

〔独鉛石〕（第31図1～3・5）

3はa大Gから、2はe大Gから、1・5はg大Gからそれぞれ出土する。完形品は2点出土している。1・3は表面を観察すると敲打整形と思われる。また両頭に粗いダメージがみられる。

5は中央側辺に両面からの敲打によるくぼみがみられ、長軸の両側が打ち欠かれている。敲打によるくぼみをつくり出した後、粗い打ち削ぎが行なわれている。やはり両頭にダメージがみられる。当初、独鉛石の仲間にいれるには適当でないようにも考えられたが、一応ここでは独鉛石の一種として扱っている。1・3の独鉛石には朱が残っている。

〔石製円盤〕（第29図9～11）

g大Gから38点出土する。加工の手順、大きさなどの違いはあるにせよ、一様に円盤状につくられており、両面が磨滅しているものがほとんどである。

また、片面に中央から放射状に細い沈刻を施す例が1点出土している。この石器に共通することは磨滅面とともに、少なからず細い沈線がみられる。

〔石皿〕（第32図2・3）

完形品は出土していない。2は縁取りのある石皿である。3は平坦な礫を利用したものであるが、当遺跡ではこの種の石皿が多い。

〔磨石〕（第31図6、第33図1・2）

いずれもg大Gから出土したものである。形態的には円形・楕円形の厚身の礫を利用し両面を磨るものがほとんどである。1・2は両面に楕円形の面取りをしたような磨痕がみられるが、周縁全体にもかるい磨痕を有する。

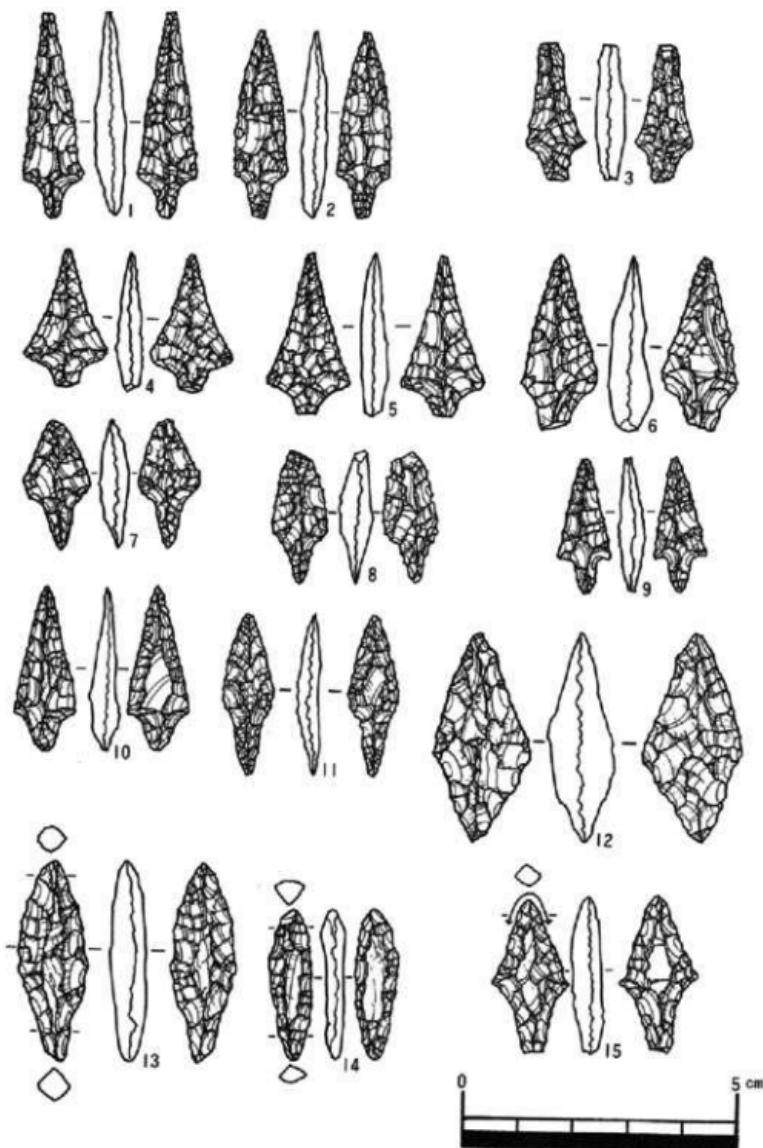
6は円形の礫を丸く面取りをしたような明確な磨面を有するものであるが、周縁にかかるい敲打痕がみられ、朱が残っている。

〔凹石〕（第33図3～7）

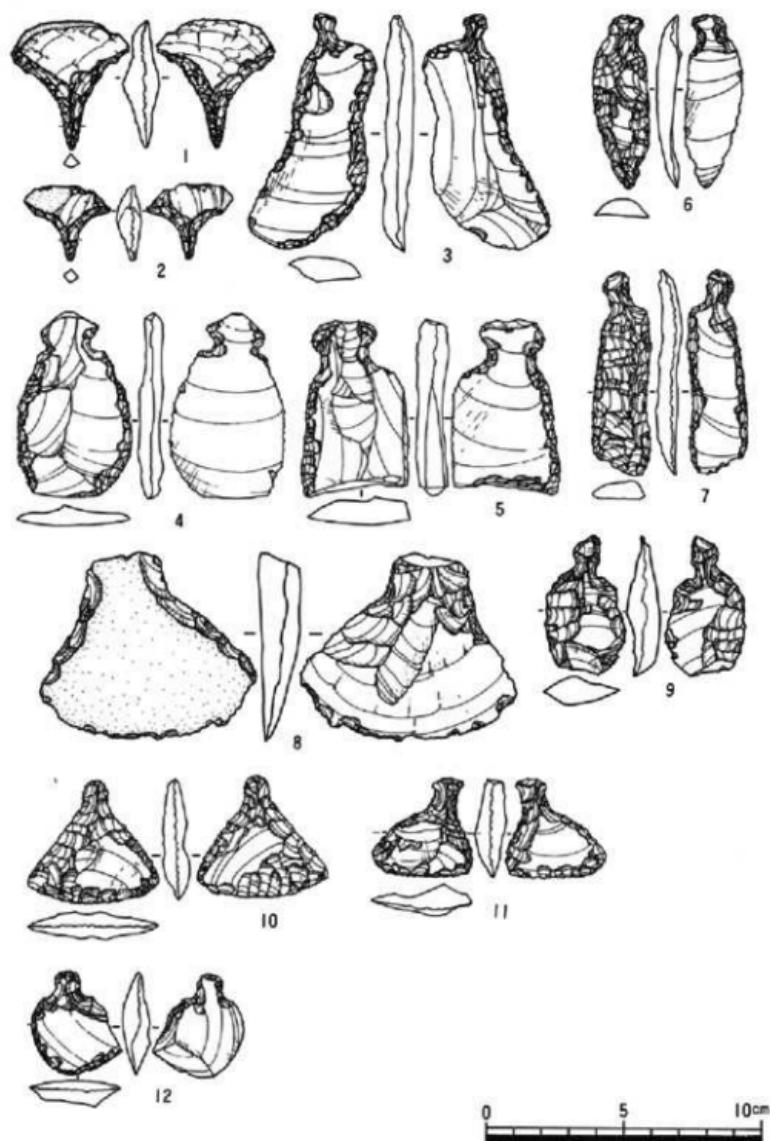
g大Gから全部で60点出土する。形態的に何種類かに分類できそうである。3・6のように棒状のもの、4・5のように円形のもの、7のように長楕円形のものなどであるが、棒状の凹石が多く出土している。

4・5は小形の円礫に凹とともに磨痕がみとめられるものである。4は片面に面取りをしたような磨面の中央に凹があり、5もほぼ同様である。

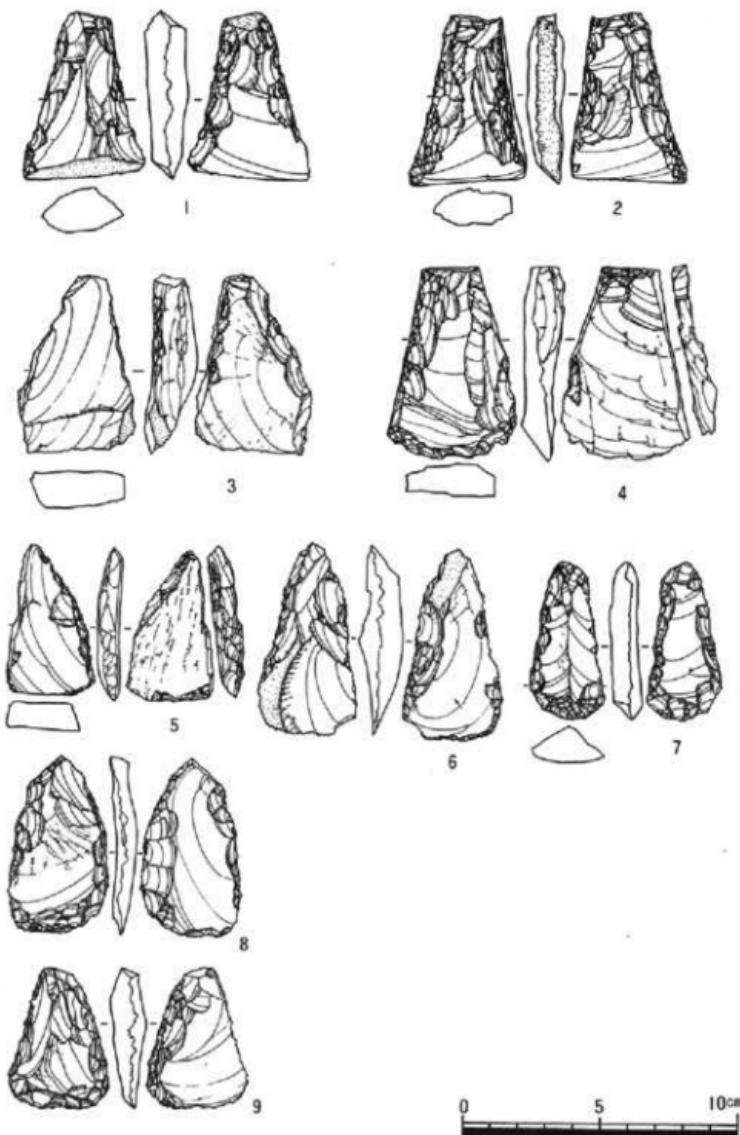
3・6は棒状の平坦な面に浅い溝状の凹みをもつもので両面にある。



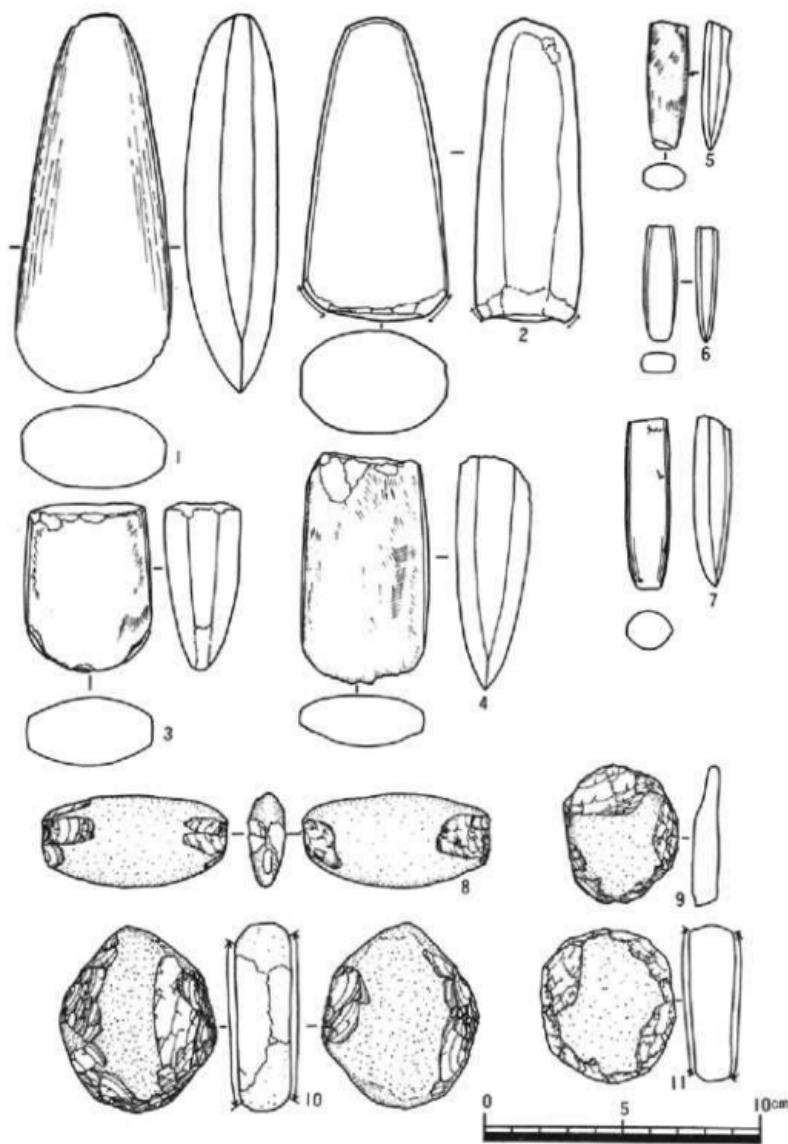
第26図 石器実測図(1)



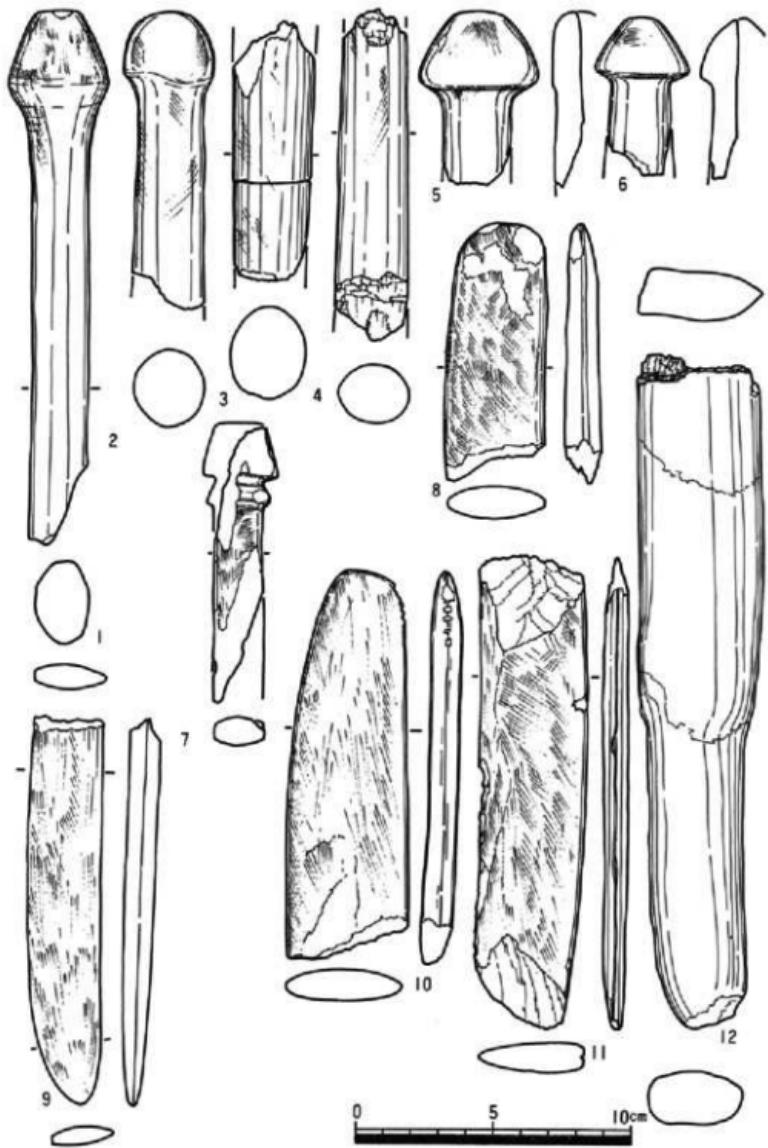
第27図 石器実測図(2)



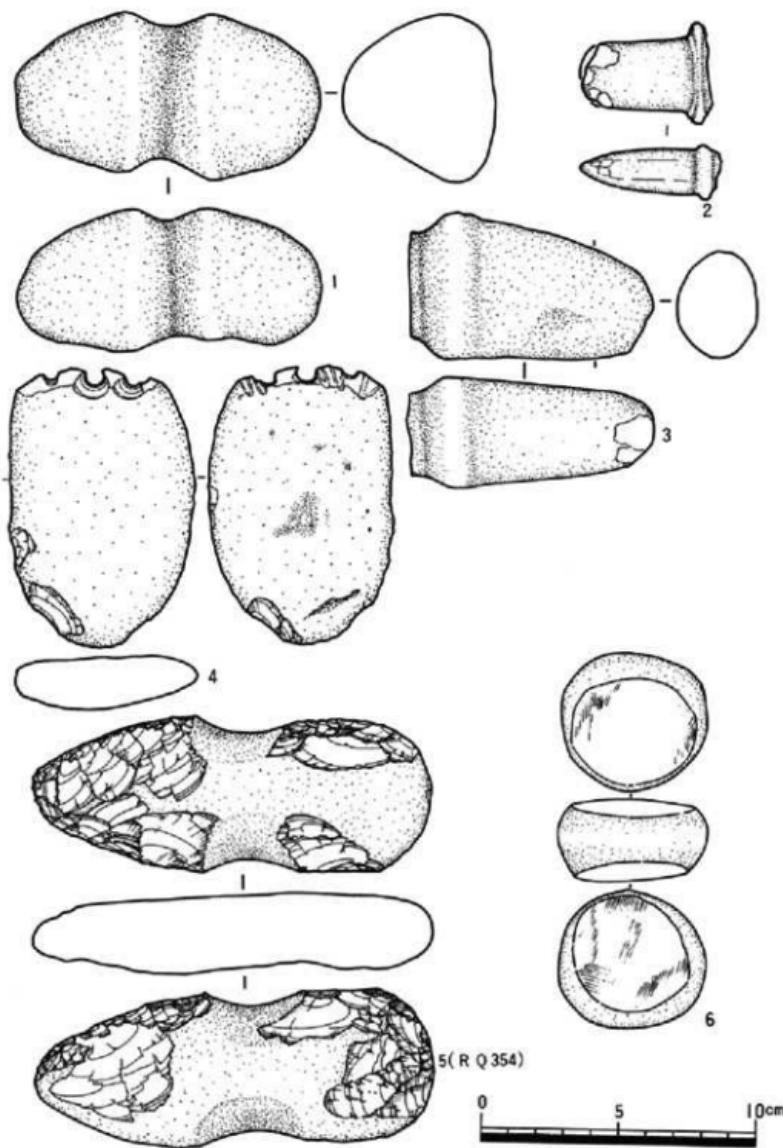
第28図 石器実測図(3)



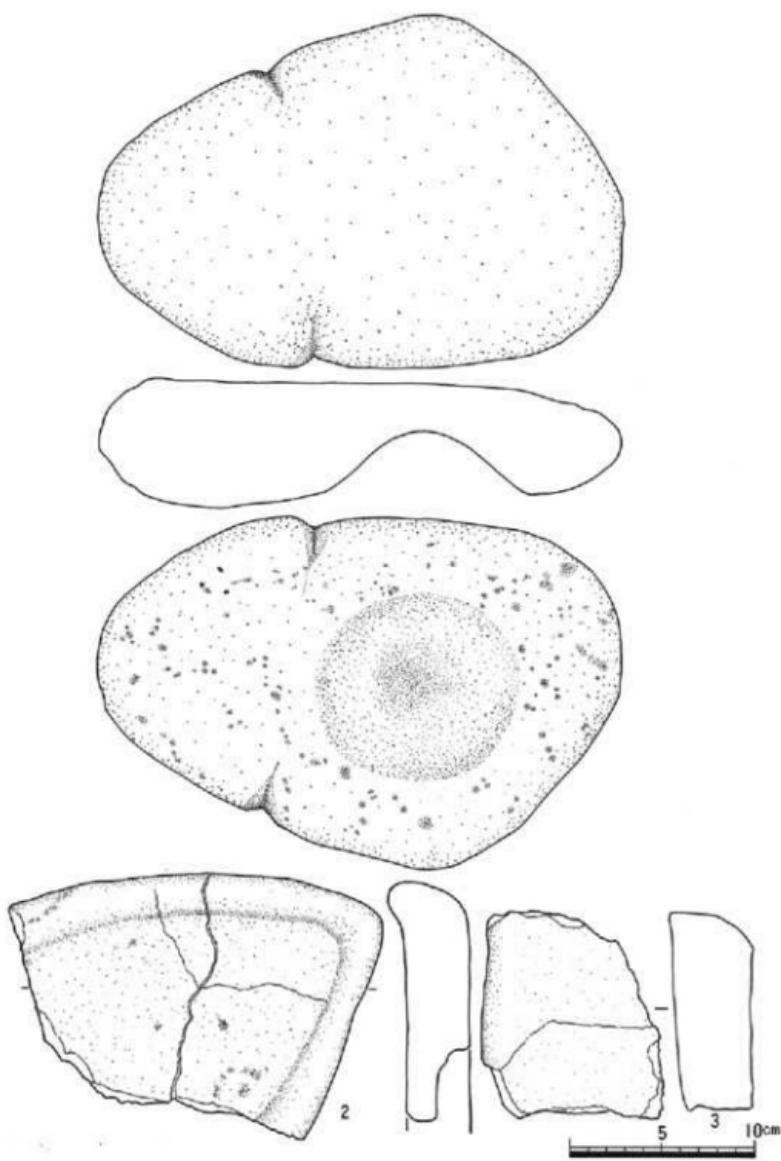
第29図 石器実測図(4)



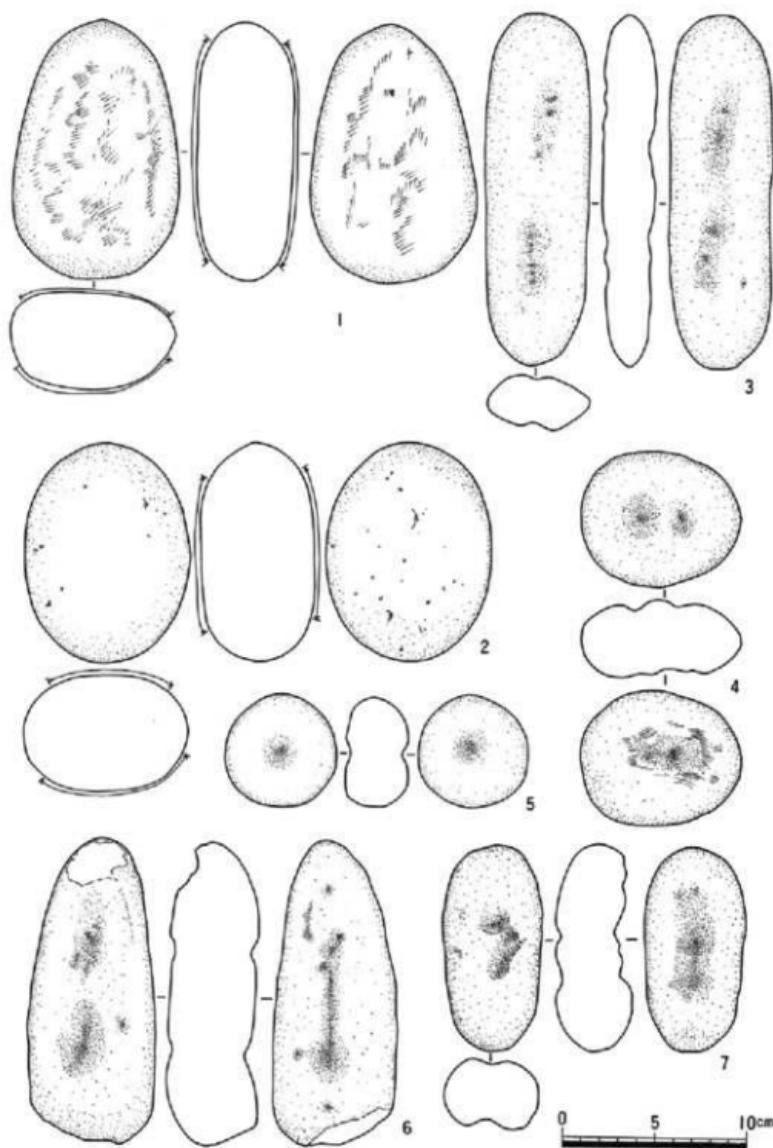
第30図 石器実測図(5)



第31図 石器実測図(6)



第32図 石器実測図(7)



第33図 石器実測図(8)

3) 土製品

〔土偶〕(第35図1~8)

出土した土偶は縄文時代後期と晩期のもので、後者のものが多く、完全なものは出土していない。3類に分類して説明する。

1類(1・2) 縄文時代後期の土偶と考えられるもので、5点出土する。内訳は足が2点、体部1点、頭部2点である。ここでは頭部2点を図化している。1はd大Gから、2はg大Gからそれぞれ出土する。1は顔面が逆三角形を呈し、口がなく、目は円形刺突文で表わされている。2は面長な顔に、円形刺突文による目と口が表わされ、高い鼻が付く。首には鋭い刺突文がめぐる。2点とも素朴で写実的な土偶である。

2類(7・8) 縄文時代晩期中葉の土偶と考えられる。g大Gから2点出土する。

1はいわゆる遮光器土偶の胴下半部で片足を失う。体部に沈線による渦巻文が施文されている。朱が残っている。8も同種土偶の足の部である。相方とも中空で、胎土は堅緻で焼成は良好である。

3類(3~6) 縄文時代晩期後葉の土偶と考えられ、10点出土する。ほとんどがa大Gから出土し、e大Gからは1点だけ出土する。

3と6は同一個体と考えられる中空の土偶である。3は右肩から乳房のある胸にかけての部分で、背面肩部には浅くくぼむ円文がみられる。6は胸部下半で片足を失う。膝の部分には貫通孔があり、それを中心に沈線の同心円文が施文される。また股間には円形の刺突文によって陰部が表現され、周辺には表裏ともに細く鋭い短かな沈線で充填されている。

4・5は右腕の部分と考えられる。表に太目の沈線が刻まれ、裏には円形の刺突文が施されている。

〔耳栓〕(第34図1~11)

全部で17点出土しており、完形のものは10点を数える。a大Gから2点、b大Gから1点、e大Gから9点、f大Gから4点がそれぞれ出土し、f大Gの15~22Gからは4点まとめて出土している。

大きさはほぼ同じで、きのこを押しつぶしたような形を呈した耳栓である。貫通孔がみられるが、径はまちまちで内外面に朱が塗布されている。10には漆が塗布されている。

〔小玉〕(第34図12~42)

全部で30点確認しているが、およそ4類に分類できそうである。

12~37は、だるまを極小化したような形を呈し、大きさもほぼ同じで27点出土している。小さな貫通孔があり、内外面に朱が塗布されている。特にこの種の小玉は、e大Gにおいてまとめて出土し、しばしば耳栓と共に伴する時がある。

38は偏平な形を呈し、小さな貫通孔を有する。10~17Gから1点出土する。

39~41は管玉形を呈したもので、3点出土する。内外面に朱が塗布されている。

42は管玉形を呈し、くびれのある小玉であり、11~21Gから1点出土する。

これらの土製小玉は、明らかに土製であるものもあるが、他の材質、たとえば骨を利用していることも考えられ、今後に検当の余地を残すが、今回ここでは一応土製品として扱い、後日その真偽を確かめたい。

〔有孔土玉〕（第36図1~5）

全部で7点出土し、そのうち代表的なもの5点を図化している。e・f大Gからの出土例が多く、1や2のタイプは17~20Gからかたまって出土する。多くのものは3~4のように丸玉形を呈しているが、1・2のように貫通孔の一方の面に、太目の沈線を刻むもののがみられる。2はくびれのある土玉である。

これらの有孔土玉は胎土に砂粒を含み粗く、作りも雑で焼成も不良である。

〔土版〕（第36図10・11）

2点だけ確認され、10は20~19Gから、11は20~21Gからそれぞれ出土する。10は梢円形を呈し、長径を挟んで両側に重層する連弧文が刻まれている。11は重層する連弧文と円形刺突文を合わせもつものである。2点とも胎土は緻密で、焼成も良好である。一部に朱が残っている。

〔スプーン形土製品〕（第36図6）

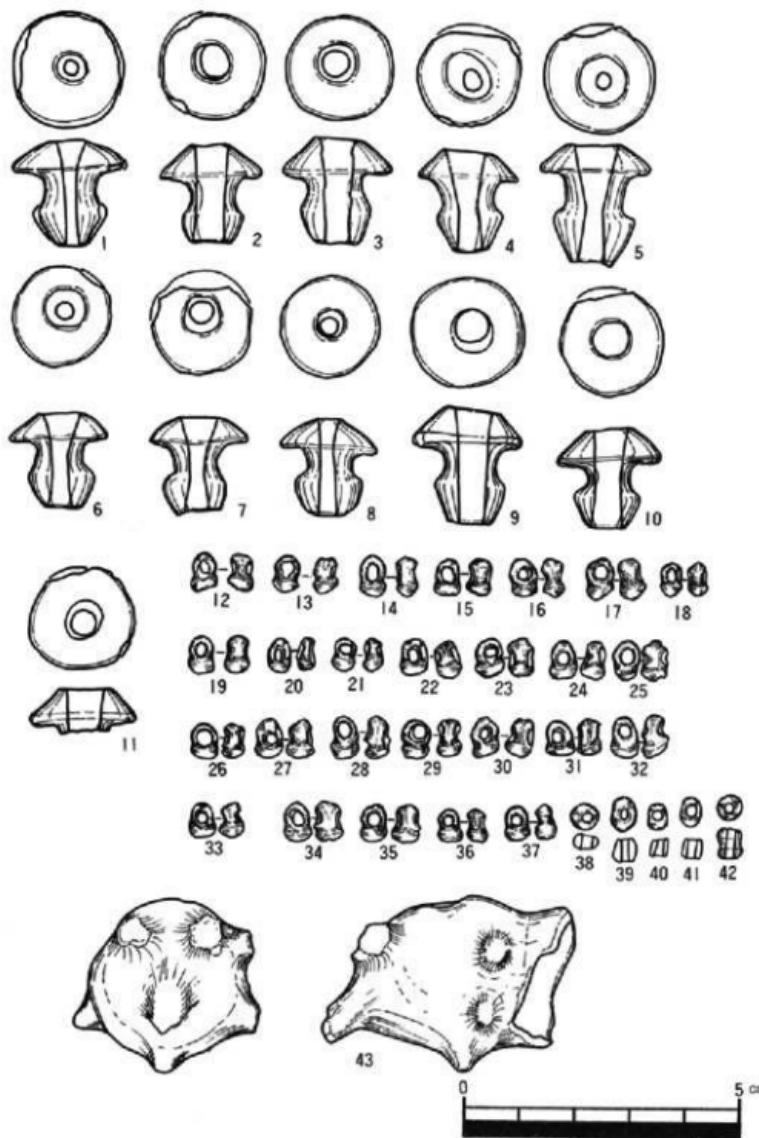
12~19Gから1点だけ出土する。柄の先端に純い沈線が刻まれ、皿状の先端の一部を失う。全体的に粗い作りであるが、胎土は緻密で焼成はやや良好である。

〔土製円盤〕（第36図7~9）

3点確認している。7・9はg大Gから、8はe大Gからそれぞれ出土する。土器の破片を利用して、角をとり丸く加工している。

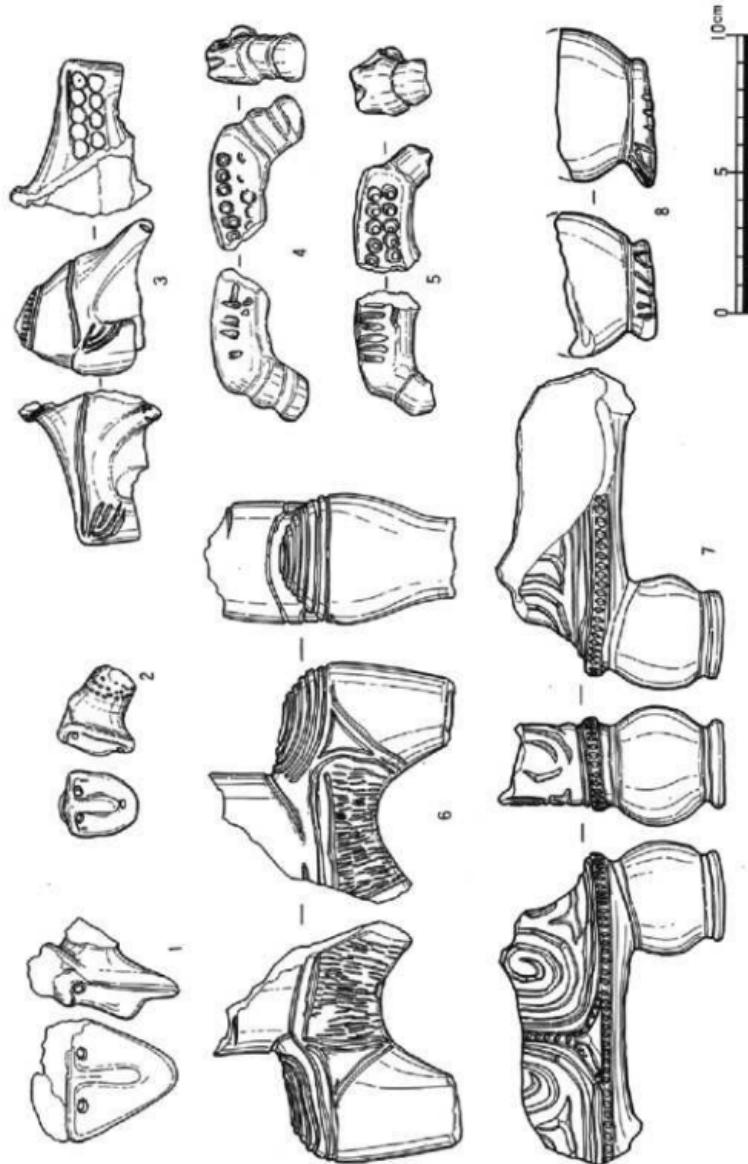
〔その他の土製品〕（第34図43）

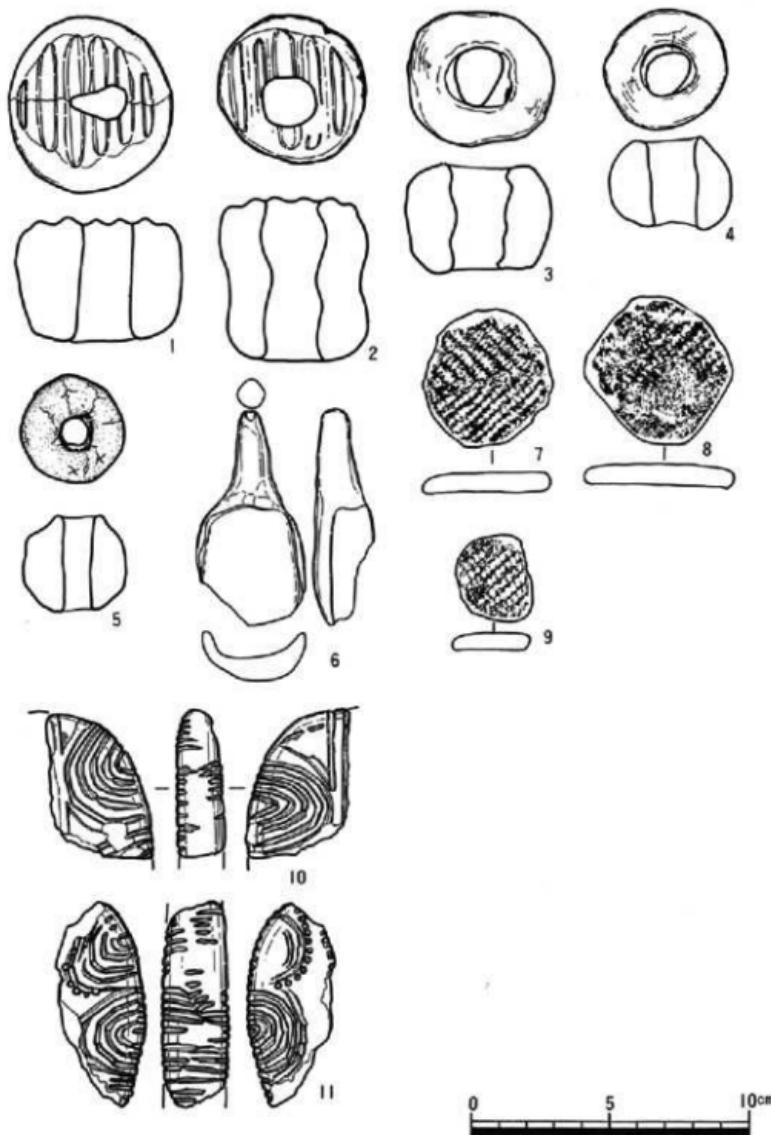
1点だけ確認され、g大Gの4号石組のそばに出土する。中は中空で指の先端がすっぽりとはいるほどの空間をもつ。長い突起のある方を正面にもってくると、何らかの動物であるようにもみえるが、突起が多く、また破損部分も多く何をかたちどったのかは不明である。



第34図 装身具・動物形土製品

第35図 土偶





第36図 土玉・スプーン形土製品・土製円盤・土版

4) 石製品

〔小玉〕(第37図1~18)

全部で18点出土する。1・2・4・13・15~18はa大Gから、3・12・14はb大Gから、5はe大Gから、6~11はg大Gからそれぞれ出土する。6の石質はヒスイと考えられる。1・9~17は緑色凝灰岩である。

〔曲玉〕(第37図21)

12~19Gから1点だけ出土する。石質は緑色凝灰岩で、非常に丁ねいな作りである。

〔胸飾り〕(第37図18~20)

a大Gから3点出土する。18は孔があけられているものの、整形がなされていない小玉と考えたほうが自然かもしれない。18・19は自然石をそのまま穿孔している。

〔岩版〕(第38図1~5)

今回の調査で際立った出土をしたのは岩版である。A地点では37点出土し、特にa大Gでは約50m'の中に20点出土する。またほとんどの岩版に朱が残っている。

1は11~18Gと12~17Gから出土したもののが接合した岩版である。岩版の1つの形態を知ることができる唯一の例である。形は隅丸方形気味で、両面の4区画された中には「コ」字状の沈線が施される。2は片面にだけ沈刻が施され、もう一方の面は自然面である。3は1号石組内から出土した岩版で、文様の沈刻が鮮明で立体感に富む。4は一見すると助骨のような沈刻を有する文様である。5は端の方に重層弧がみられるもので、太目の沈線で刻まれている。

〔その他の石製品〕

第37図22：棒状の小さな石に、長軸に直交する沈刻を端よりに一条づつ施すもので、断面が丸くなる。

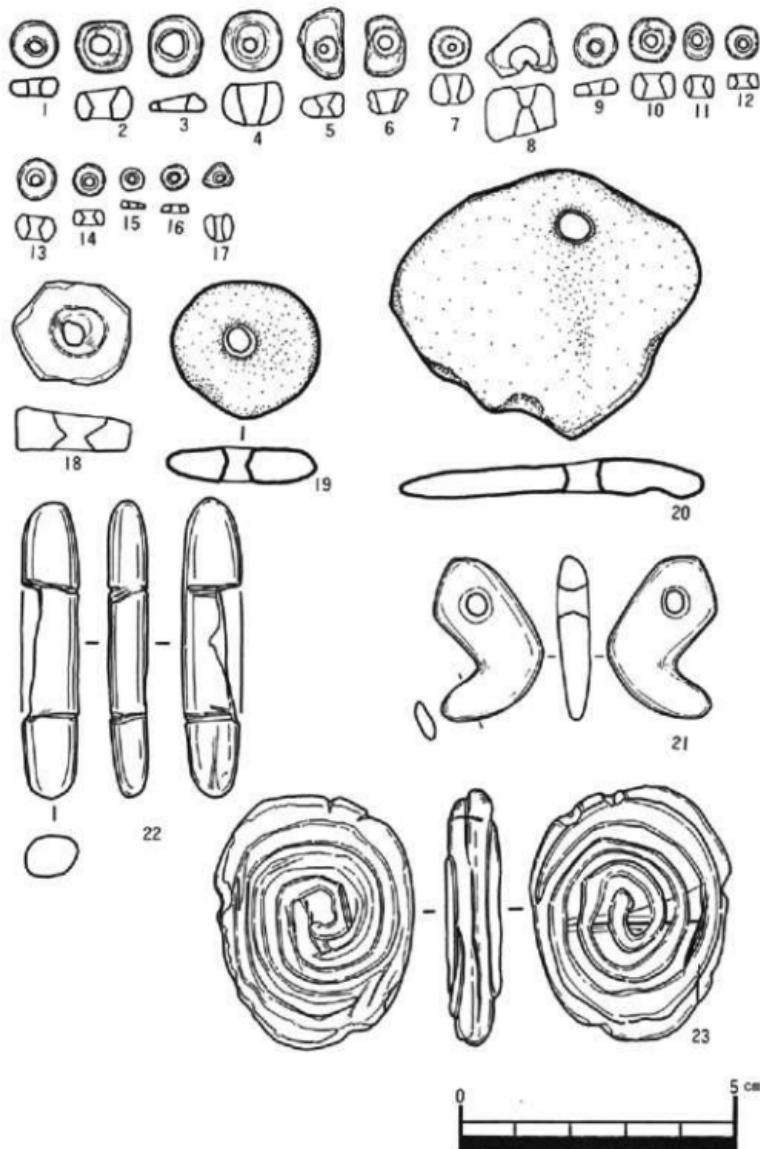
第37図23：過巻状の太い沈刻が両面に施され、周縁に鋭い沈刻を有する。

第31図4：偏平な円盤の一端に貫通孔を有し、片面中央にかかるダメージを有する。

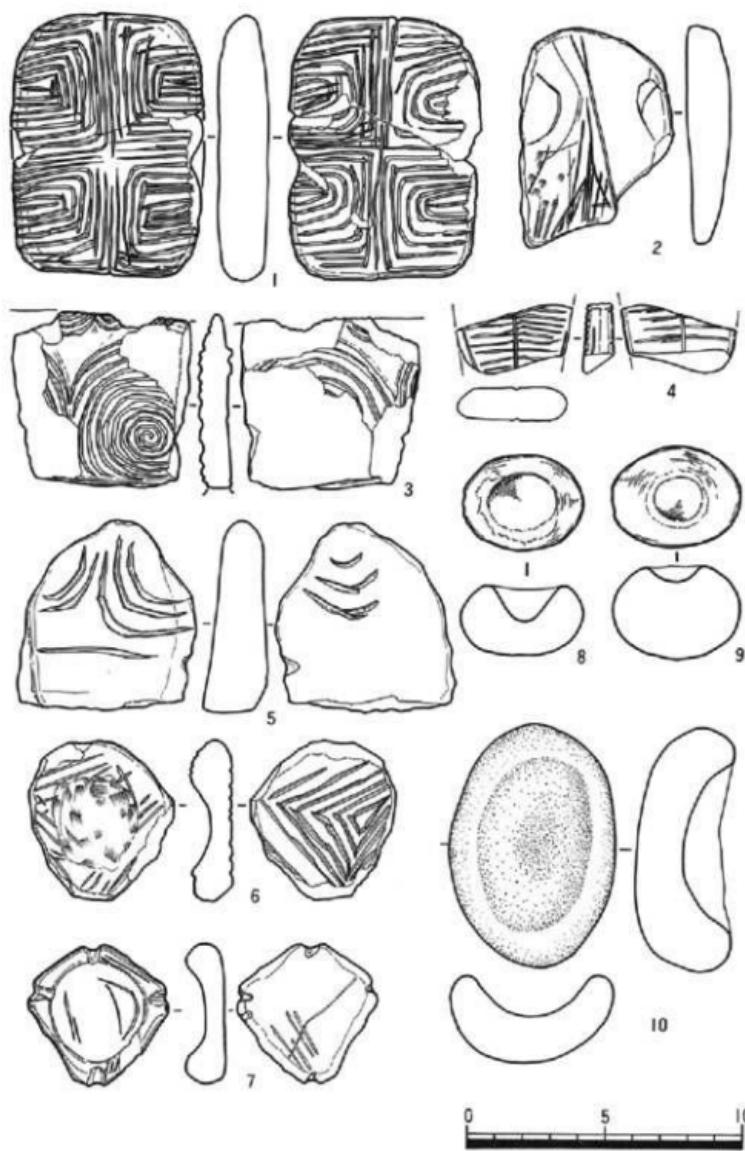
第38図6・7：「U」字状の残いくぼみを有するもので13~18Gから2点確認している。6は岩版を転用してつくったもので、円盤状に整形し、ほぼ中央に径3cmほどの「U」状のくぼみが削りつくされている。朱が残っている。

7は四辺形を呈したもので、4つ角に太い刻目がはいる。ほぼ中央に径3.5cmほどの「U」字状のくぼみが削りつくされているもので、裏面には朱の塗布された痕跡を残す。2点とも石質は凝灰岩質泥岩製である。

第38図8~10：3点確認している。8は20~24Gから、9は10~15~14Gから、10は19~20Gからそれぞれ出土する。8・9は橢円形で厚身の石に擂鉢状のくぼみを有する。



第37図 装身具・他



第38図 岩版・他

5) アスファルト付着の遺物

〔土 器〕(第39図1~3)

1はC地点から出土したアスファルトのはいっている小形壺である。表面の底辺部には土器のつなぎ面から滲み出てきているアスファルトがみられる。

口縁部の一部を欠うだけの完形で、口縁部には大突起を挟んで小突起を有し、口唇には沈線がめぐる。また口縁内面にも沈線が施されている。時期は精製土器の伴出関係から大洞A式と考えられる。C地点の遺物を1点だけ紹介するという、摘み食い的な方法になってしまったが、その重要性を考え取てここで取り上げている。

2は23—24Gから出土する。注口土器の破片で、注口部付け根にアスファルトが付着し、第18図17とともに2点確認する。

3は21—23Gから出土する。皿形土器の破片と考えられ、底部にアスファルトが付着している。

〔石 器〕(第39図4~12)

4は有茎石錐で15—22Gから出土する。茎の部にアスファルトが付着している。

5~8は石小刀で抉りの部分にみとめられ4点確認する。

5は20—24Gから出土した長身の石小刀である。背面側に帯状の付着痕が明瞭にみられ主要剥離面側では、抉り部分に付着がみられ、打瘤部が空白帶となる。

6は13—20Gから出土する。両面とも不明瞭な付着痕だが、しもふり状の痕跡がみとめられる。

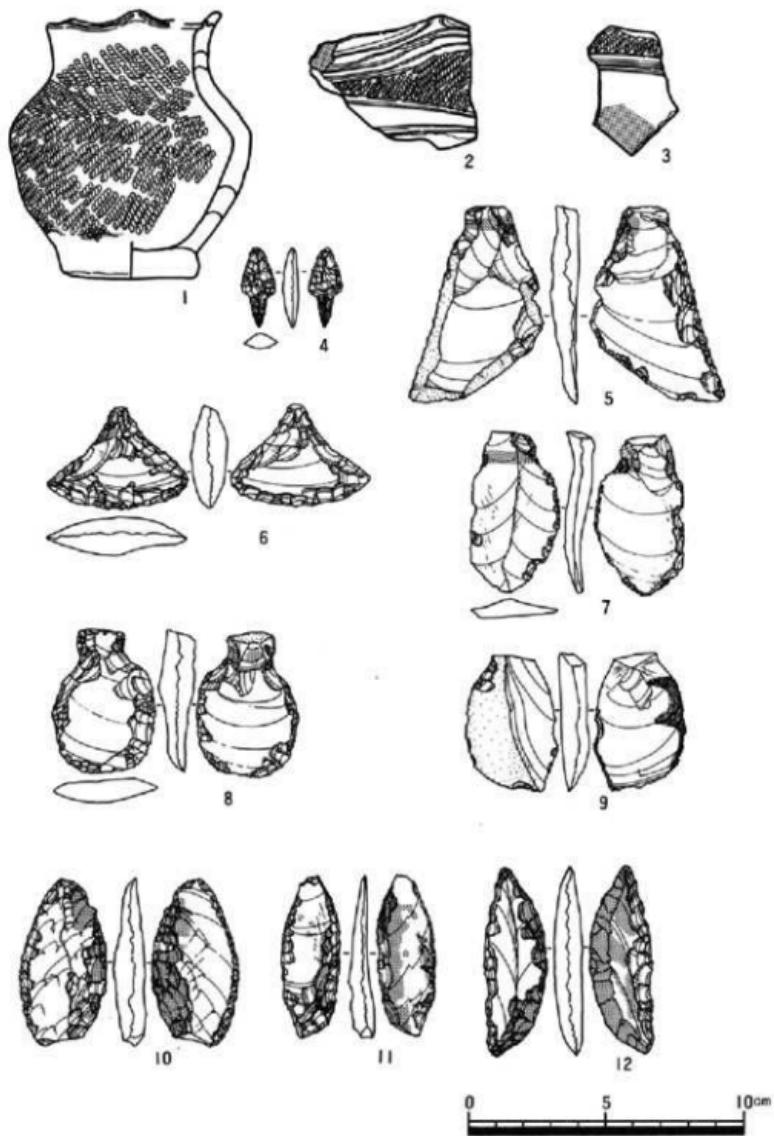
7はa大Gから出土した長身の石小刀である。5と同様背面側に帯状の付着痕が明瞭にみられ、主要剥離面側では抉りの部分にみられ、打瘤部が空白帶となる。

8は第21図65の鉢形土器の内面にへばりついて出土した石小刀である。主要剥離面側に帯状の付着痕がみられ、背面側に一部空白帶がみられる。

9は24—20Gから出土した二次加工のある剝片である。自然面を残す側の縁辺一部と、主要剥離面側縁辺に付着痕がみられる。

10~12は身の薄い尖頭状をした石器で10は20—21Gから、11は13—18Gから、12は12—23Gからそれぞれ出土する。形態的な特徴から3点を木葉形の対称形として考えた場合、対称軸に対して、アスファルトの付着が片側に寄る傾向が指摘できるようである。また、3点とも主要剥離面側にアスファルトが良く残っており、剥離面に沿って付着するものが多い。

一方、付着痕がみられない刃部側は、磨耗痕が明瞭に認められ使用痕と考えられる。この種の石器は着柄して使用された石器と考えられ、注意を要する石器であろう。



第39図 アスファルト付着の土器・石器

IV 総 括

漆坊遺跡はA地区とC地区の2地点に分けることができるが、今回はA地区で検出された遺構と出土した遺物の概要について略述してきた通りである。しかし、A地点でもa・b大Gについては、かるく触れることしかできなかった。調査・整理の不備を考慮にいれながら、この調査の成果をまとめ、漆坊遺跡の特徴及び性格等について、若干の問題を指摘するにとどめ、今後の課題としておきたい。

(1) 本遺跡は、山形県尾花沢市大字牛房野字田沢前に所在し、牛房野川によって形成された沖積平野の小右岸段丘上に立地する、標高約122~124mを測り、現在は水田になっている。

遺跡が営まれた時期は、縄文時代後期、晩期である。

(2) 検出された遺構の中で、土壤は縄文時代後期と考えられ、ピット群は不明確である。溝状遺構は、構築面や切り合い関係などから、縄文時代のものではないと考えられる。

g大Gで検出された石組遺構は、縄文時代晩期中葉の所産と考られるが、共伴関係を示す遺物が少なくなく、なお流動的である。

(3) 出土した遺物は縄文時代後期と晩期のもので、晩期の遺物が主体となる。

第I群土器から第V群土器までは後期の土器群で、土偶の第1類がこれらの土器群に伴出するものと考えられる。

第VI群土器から第IX群土器までは晩期の土器群で、大洞BC、C₁、C₂、A、A'式の各型式がみられ、大洞C₁式はe大Gに、大洞C₂式はg大Gに、大洞A式はa・b大Gにそれぞれ主体的に出土する傾向がみられる。

おおよそ、第VI群土器は大洞BC式に、第VII群土器はC₁式に、第VIII群土器の1類、2a類、3a類、4類、5a類等はC₂式に、第IX群土器の1類、2類、3a類、4a類等はA式にそれぞれ比定できると考えられる。尚検当の余地がある。

(4) これらの土器群とともに、土製品、石製品にも貴重な資料が得られている。土偶をはじめ、土版・土製円盤・耳飾り(耳栓)・頸飾り・有孔土玉・スプーン形土製品等の土製品が遺存良く出土し、石剣・石刀・石棒・岩版・小玉類・曲玉・独鉗石等の石製品も多数出土する。特に岩版や、土製小玉が集中して出土するなど、宗教的な意味あいをもつ遺物や、装飾品と考えられる遺物が多いことは、当遺跡の特徴の1つと言えよう。

(5) 特殊な遺物も去ることながら、生産・生活にかかわる用具も豊富にみられる。これら一切の遺物は、斜面及び低地にみられることや、遺物の破損度が大きいことなどから、

土器淵的な性格が考えられるが、e 大G、f 大Gでは埋め廻的な施設もみられたり、g 大Gでは石組遺構や注口土器が集中している事柄など、各々地区によって違った特徴がみられる。

当時の日常生活の拠点となる住居跡は検出できなかったが、日常生活を営む中で、生活の一つの場であることには間違いなく、当遺跡で調査された区域が何であるかは大きな課題としたい。

最後に、発掘調査及び整理作業の最中、次のかたがたより御協力、御指導を頂いた。記して感謝の意を表する。

佐々木洋治・中嶋寛・渡辺修・名和達朗・渋谷孝雄・阿部明彦・佐藤正俊（山形県教育庁文化課）、佐藤庄一（庄内教育事務所）、関淳一（大石田町歴史民俗資料館主事）、小野稔（尾花沢中学校教諭）、山口博之（山形市立第七小学校教諭）、小幡金弥（尾花沢小学校校長）、星川茂平治（尾花沢市文化財保護委員）（順序不同、敬称略）

引用・参考文献

- 1965 林謙作 「縄文文化の発展と地域性 2、東北」『日本の考古学』河出書房新社
- 1969 今井富士雄・磯崎正彦『十腰内』十腰内遺跡調査団
- 1970 『山形県史』考古資料 資料篇11
- 1972 芹沢長介『石器時代の日本』栄地書館
- 1973 佐藤慎宏・佐藤鎮雄『神矢田遺跡』—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察
— 遊佐町教育委員会
保坂三郎『是川遺跡』中央公論美術出版
- 1976 林謙作『亀ヶ岡文化論』『東北考古の諸問題』東出版
- 1978 佐藤庄一「山形県における縄文時代最末期の土器様相」『山形考古』第2巻
第3号 山形考古学会
玉川一郎『三貫地』新地町教育委員会
- 1979 本常寿一編『八天遺跡』図版編 北上市教育委員会
- 1980 佐藤正俊・佐藤義信・大類誠『水上遺跡』山形県文化財保護協会
藤村東男「大洞諸型式設定に関する二・三の問題」『考古風土記』5号
佐藤庄一「山形県にみる亀ヶ岡文化の特質と変容」『考古風土記』5号
横山勝栄「新潟北部における土版・岩版の存在とその意義」『考古風土記』
5号
本堂寿一編『八天遺跡』本文編 北上市教育委員会
中村良幸『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町教育委員会
『細越遺跡』青森県教育委員会
『鷹架遺跡』青森県教育委員会
- 1981 『水上遺跡』第2次発掘調査報告書
『山口遺跡』仙台市教育委員会・仙台市富沢長町土地区画整理組合



◀漆坊遺跡遠景
(樋跡頂部から
望む)



漆坊遺跡遠景▶



◀遺構検出状況



◀ a・b 大G土器出土状況



調査風景▶





▲ 4号石組



▲ 3号石組



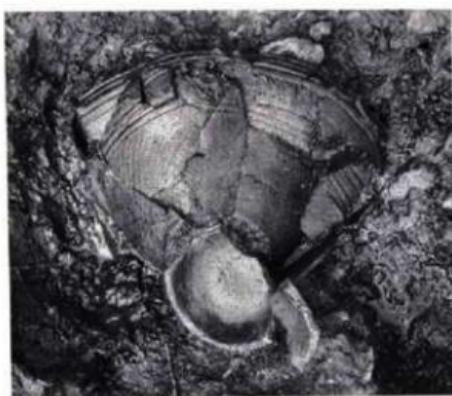
▲ 1号石組



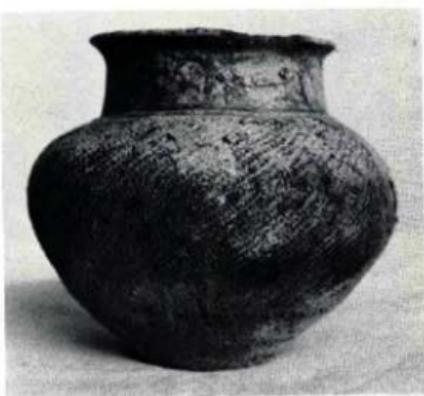
◀ 2号石組

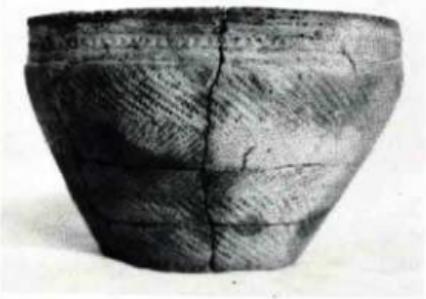


◀ g 大 G













◀ 篦状石器
スクレイパー



アスファルトの付着▶
した石器と土器



◀ 石棒
石刀
石剣

土製小玉
石製小玉
曲玉
胸飾り



▲
耳栓

有孔土玉▶



◀土偶・スプーン形土製品

独鉱石・他▶



◀石製円盤



石製品・石錘▶



◀土版・岩版

山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第2集

漆坊遺跡
発掘調査報告書

昭和57年3月20日発行

編集・発行 尾花沢市教育委員会
尾花沢市大字尾花沢2861
電話 02372-2-1111

印刷 大場印刷株式会社
山形市十文字大原485-10
(印刷団地内)
0236-86-6155